



Sun™ Identity Manager 8.0

インストール

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 820-5457

Copyright © 2008 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

この製品は SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、この製品を使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

ご使用はライセンス条項に従ってください。

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

Sun、Sun Microsystems、Sun ロゴ、Java、Solaris、Sun Java System Identity Manager、Sun Java System Identity Manager Service Provider Edition サービス、Sun Java System Identity Manager Service Provider Edition ソフトウェアおよび Sun Identity Manager は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下であり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

目次

はじめに	ix
対象読者	ix
内容の紹介	ix
表記上の規則	x
書体の表記規則	x
記号	xi
関連ドキュメントとヘルプ	xii
オンライン上の Sun リソースへのアクセス	xiii
Sun テクニカルサポートへのお問い合わせ	xiii
関連するサードパーティー Web サイト	xiii
ご意見、ご要望の送付先	xiv
第 1 章 インストールの前提条件	1
サポートされているソフトウェアと環境	1
メモリー要件	1
設定作業の流れ	2
インストールの前に必要な作業	3
インデックスリポジトリファイルの格納場所を決める	3
ステージングディレクトリの使用	3
Web アプリケーションディレクトリの使用	4
Java 仮想マシンと Java コンパイラの設定	4
インデックスデータベースの設定	5
サンプルデータベーススクリプトについて	5
MySQL の設定	6
Oracle の設定	7
DB2 の設定	8
SQL Server の設定	10
Service Provider トランザクションデータベースの設定	11
国際化の設定	12
次の作業	12

第 2 章 Sun Application Server 用の Identity Manager のインストール手順	13
開始する前に	13
インストール手順	13
手順 1: Sun Application Server ソフトウェアをインストールする	14
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	14
詳細情報の入手	17
手順 3: Identity Manager を Sun Application Server に配備する	18
手順 4: Application Server 上の server.policy ファイルを編集する	19
手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	21
第 3 章 Tomcat 用の Identity Manager のインストール手順	23
開始する前に	23
インストール手順	23
手順 1: Tomcat ソフトウェアをインストールする	24
Windows 上でのインストール	24
UNIX 上でのインストール	24
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	25
詳細情報の入手	28
手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	28
第 4 章 WebLogic 用の Identity Manager のインストール手順	29
開始する前に	29
インストール手順	29
手順 1: WebLogic ソフトウェアを設定する	30
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	30
詳細情報の入手	34
手順 3: アプリケーションを配備する	34
手順 4: IIS のデフォルトドキュメントにアプリケーションのメインページを追加する (オプション)	34
手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	34
第 5 章 WebSphere 用の Identity Manager のインストール手順	35
開始する前に	35
インストール手順	35
手順 1: Application Server を準備する	36
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	37
手順 3: Application Server を設定する	40
手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	42
第 6 章 JBoss 用の Identity Manager のインストール手順	43
開始する前に	43
インストール手順	43

手順 1: JBoss ソフトウェアをインストールする	44
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	45
手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	48
第 7 章 Oracle Application Server 10g 用の Identity Manager のインストール手順	49
開始する前に	49
インストール手順	49
手順 1: Oracle Application Server ソフトウェアをインストールする	50
手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする	50
詳細情報の入手	53
手順 3: Identity Manager を Oracle Application Server に配備する	54
手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	55
第 8 章 Sun Identity Manager Gateway のインストール手順	57
前提条件	57
インストール	58
エラーメッセージ	59
次の作業	59
第 9 章 Identity Manager 入門	61
言語サポートの有効化	62
Mac OS X 用の Identity Manager の配備	62
lh.sh ファイルを変更する	62
ユーザーインターフェースの MultiSelect コンポーネントをカスタマイズする	63
Safari Enhancer を管理者インターフェースに使用する	63
lh 環境の設定	64
ヘルプおよびその他の情報	64
第 10 章 アプリケーションのアンインストール手順	67
ソフトウェアの削除	67
Windows の場合	67
UNIX の場合	68
アプリケーションデータベースの削除	68
第 11 章 Identity Manager の手動インストール手順	71
インストール手順	71
手順 1: Application Server ソフトウェアをインストールする	71
手順 2: アプリケーションソフトウェアをインストールする	72
Windows の場合	72
UNIX の場合	72
処理を続行する前に	73

手順 3: Identity Manager のインデックスデータベース接続を設定する	73
Windows または X ウィンドウ (UNIX) 環境	73
X ウィンドウ以外の環境	74
手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする	74
付録 A インデックスデータベースのリファレンス情報	75
付録 B Identity Manager のデータソースの設定	79
Identity Manager の WebSphere データソースの設定	79
Servlet 2.3 データソース	80
JDBC プロバイダの設定	80
WebSphere JDBC データソースの設定	81
認証データの設定	81
データソースの設定	82
WebSphere クラスタ内のデータソースの設定	82
Identity Manager リポジトリのデータソースの指定	83
setRepo コマンドへの追加の JNDI プロパティの指定	85
Identity Manager の WebLogic データソースの設定	85
WebLogic データソースの作成	86
接続プールの作成	86
JDBC データソースの作成	87
Identity Manager リポジトリのデータソースの指定	89
Identity Manager の Sun Application Server データソースの設定	90
Identity Manager の JBoss データソースの設定	92
データソースの作成	92
Identity Manager のデータソースの指定	92
Identity Manager の Oracle Application Server データソースの設定	93
Oracle Application Server データソースの作成	93
接続プールの作成	93
JDBC データソースの作成	94
Identity Manager リポジトリのデータソースの指定	95
付録 C データベースリポジトリのパスワードの変更	97
Identity Manager にパスワードが格納される場合	97
データソースにパスワードが格納される場合	99
付録 D setRepo リファレンス	101
使用法	101
location_flags	101
オプション	102
構文	102
例	103

付録 E DBMS の復旧とリポジトリ	105
リポジトリの復旧	105
redo ログ	106
索引	107

はじめに

この『Sun™ Identity Manager インストール』では、Identity Manager および関連するソフトウェアのインストールと更新に役立つ詳細な情報と手順を説明します。

対象読者

『Identity Manager インストール』は、Identity Manager をインストールして初期配備タスクを実行するユーザーを対象としています。

配備担当者は、アプリケーションサーバー、データベース、およびネットワーク接続に精通している必要があります。

内容の紹介

『Identity Manager インストール』は、次の章で構成されています。

- [第1章「インストールの前提条件」](#) – システム要件および Identity Manager ソフトウェアをインストールする前に実行すべきタスクについて説明します。
- [第2章から第7章](#)では、Identity Manager および関連ソフトウェアをインストールして、次のアプリケーションサーバーと連携させるための手順について説明します。
 - [第2章](#) – Sun Application Server
 - [第3章](#) – Tomcat
 - [第4章](#) – WebLogic
 - [第5章](#) – WebSphere
 - [第6章](#) – JBoss

- 第7章 – Oracle
- 第8章「Sun Identity Manager Gateway のインストール手順」 – Sun Identity Manager Gateway をインストールする手順を説明します。
- 第9章「Identity Manager 入門」 – Identity Manager の使用を開始する方法、およびヘルプと情報の参照先について説明します。
- 第10章「アプリケーションのアンインストール手順」 – この製品のインストール済みのバージョンを削除する手順について説明します。
- 第11章「Identity Manager の手動インストール手順」 – Identity Manager のインストールを代替方法として手動で行う場合の手順について説明します。
- 付録A「インデックスデータベースのリファレンス情報」 – Identity Manager インストール時にインデックスデータベースを設定する場合に、選択するオプションを示します。
- 付録B「Identity Manager のデータソースの設定」 – WebSphere または WebLogic データストアを指すように Identity Manager のリポジトリ設定を更新する方法について説明します。
- 付録C「データベースリポジトリのパスワードの変更」 – インデックスデータベースのリポジトリパスワードを変更する手順について説明します。
- 付録D「setRepo リファレンス」 – setRepo コマンドの参照ページです。
- 付録E「DBMS の復旧とリポジトリ」 – リポジトリを障害から回復する手順を説明します。

表記上の規則

この節の表では、このガイドで使用する表記規則について説明します。

書体の表記規則

次の表では、このガイドで使用する書体の違いについて説明します。

表 1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123 (モノスペース)	API および言語要素、HTML タグ、Web サイトの URL、コマンド名、ファイル名、ディレクトリパス名、画面上のコンピュータ出力、サンプルコード。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.

表 1 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
AaBbCc123 (太字のモノスペース)	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力とは区別して示します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i> (イタリック)	実際の名前または値によって置き換えられるコマンドまたはパス名の可変部分。	これらを、 <i>class</i> オプションと呼びます。 このファイルは、 <i>install-dir</i> /bin ディレクトリにあります。

記号

次の表は、本書で使用する記号の表記規則を示しています。

表 2 記号の表記規則

記号	説明	例	意味
[]	省略可能なコマンドオプションが入ります。	ls [-l]	-l オプションは省略可能です。
{ }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションでは、y か n のどちらかの引数を使用する必要があります。
-	同時に押すキーを連結します。	Control-A	Ctrl キーと A キーを同時に押します。
+	連続して押すキーを連結します。	Ctrl+A+N	Ctrl キーを押し、離してから、以後のキーを続けて押します。
>	グラフィカルユーザーインタフェースで選択するメニュー項目を示します。	「ファイル」>「新規」>「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

関連ドキュメントとヘルプ

Sun は、Identity Manager をインストール、使用、および設定する際に役立つ以下の印刷されたまたはオンラインのマニュアルと情報を提供しています。

- 『Identity Manager Upgrade』: Identity Manager と関連ソフトウェアをアップグレードおよび設定する手順と参照情報が記載されています。
- 『Identity Manager 管理ガイド』: Identity Manager を使用して企業情報システムへのセキュリティー保護されたユーザーアクセスを実現するために、手順、チュートリアル、実例を説明します。
- 『Identity Manager の配備に関する技術情報』: Identity Manager 製品の概念に関する概要 (オブジェクトアーキテクチャーを含む) および基本的な製品コンポーネントの紹介が記載されています。
- 『Identity Manager ワークフロー、フォーム、およびビュー』: Identity Manager のワークフロー、フォーム、およびビューの使用法を示す参照情報と手順が記載されています。この中には、これらのオブジェクトをカスタマイズするのに必要なツールに関する情報が含まれます。
- 『Identity Manager リソースリファレンス』: アカウント情報をリソースから Sun Java™ System Identity Manager に読み込んで同期する方法を示す参照情報と手順が記載されています。
- 『Identity Manager 配備ツール』: さまざまな Identity Manager 配備ツールの使用方法に関する参照と手順情報が記載されています。規則と規則ライブラリ、共通のタスクとプロセス、辞書サポート、Identity Manager サーバーによって提供される SOAP ベースの Web サービスインタフェースなどの情報が含まれます。
- 『Identity Manager Tuning, Troubleshooting, and Error Messages』: Identity Manager のエラーメッセージと例外に関する参照と手順情報、および作業中に発生する可能性のある問題の追跡とトラブルシューティングの手順が記載されています。
- 『Identity Manager Service Provider Deployment』: Sun™ Identity Manager Service Provider の計画と実装の方法を示す参照情報と手順が記載されています。
- Identity Manager ヘルプ

Identity Manager の完全な手順、参照情報、用語の説明を記載したオンラインガイドランス、オンライン情報です。ヘルプにアクセスするには、Identity Manager メニューバーの「ヘルプ」リンクをクリックします。主要なフィールドには、ガイドランス (フィールド固有の情報) があります。

オンライン上の Sun リソースへのアクセス

製品のダウンロード、プロフェショナルサービス、パッチとサポート、および開発者向け追加情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

- ダウンロードセンター
<http://www.sun.com/software/download/>
- プロフェショナルサービス
<http://www.sun.com/service/sunps/sunone/index.html>
- Sun Enterprise サービス、Solaris パッチ、およびサポート
<http://sunsolve.sun.com/>
- 開発者向け情報
<http://developers.sun.com/prodtech/index.html>

Sun テクニカルサポートへのお問い合わせ

製品のドキュメントで解決できない、本製品に関する技術的な質問については、次のいずれかの方法でカスタマサポートにお問い合わせください。

- オンラインサポート Web サイト <http://www.sun.com/service/online/us>
- 保守契約に基づいて提供されるサポート電話番号

関連するサードパーティー Web サイト

このマニュアルで取り上げる他社の Web サイトが使用可能かどうかについて、Sun は関知いたしません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆる内容、広告、製品、およびその他素材を保証するものではなく、責任または義務を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆるコンテンツ、製品、またはサービスによって生じる、または生じたと主張される、または使用に関連して生じる、または信頼することによって生じる、いかなる損害または損失についても責任または義務を負いません。

ご意見、ご要望の送付先

Sun ではマニュアルの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。

コメントをお送りになる場合は、<http://docs.sun.com> にアクセスして「コメントの送信」をクリックしてください。オンラインフォームで、ドキュメントのタイトルと Part No. を入力します。Part No. は、マニュアルのタイトルページまたは最上部に記載されている 7 桁または 9 桁の番号です。

たとえば、本書のタイトルは『Sun™ Identity Manager インストール』であり、Part No. は 820-5457 です。

インストールの前提条件

次の節に示されている情報および手順を使用して、Identity Manager をインストールする準備をしてください。

- [サポートされているソフトウェアと環境](#)
- [メモリー要件](#)
- [設定作業の流れ](#)
- [インストールの前に必要な作業](#)

Identity Manager 8.0 へのアップグレードの詳細については、『Identity Manager Upgrade』ガイドを参照してください。

サポートされているソフトウェアと環境

Identity Manager と互換性のあるソフトウェアと環境に関する詳細については、『Identity Manager リリースノート』を参照してください。

メモリー要件

メモリーの必要量を判断し、使用するアプリケーションサーバーの JVM に値を設定します。次のように、Java コマンド行に最大および最小ヒープサイズを追加することによって、この設定を行います。

```
java -Xmx512M -Xms512M
```

注 最高のパフォーマンスを得るには、両方の値を同じサイズに設定します。使用するシステム固有の実装状態によっては、調整サーバーを実行する場合に、これらの値を増やすことが必要になる場合があります。

パフォーマンス調整を目的とする場合は、`waveset.property` ファイルに次の値を設定することもできます。

```
max.post.memory.size value
```

注 `max.post.memory.size` は、ディスクにスプールせずに、HTML FileSelect コントロールなどによって書き込み先のファイルに含めることのできる最大バイト数を指定します。一時ファイルに書き込むためのアクセス権がない場合は、ディスクにスプールしなくてもよいように、`max.post.memory.size` を増やしておきます。デフォルト値は 8K バイトです。

その他のシステム要件および情報については、『Identity Manager リリースノート』を参照してください。

設定作業の流れ

どのアプリケーションサーバーとデータベースを選択するかによって、設定の手順は異なります。一般に、次のような手順で行います。

- Java コンパイラと JVM のインストールやインデックスデータベースの設定など、事前に必要な作業の実行
- アプリケーションサーバーのインストールと設定
- Identity Manager ソフトウェアのインストールと設定

注 インストーラは、デフォルトの **Configurator** アカウントの名前が変更されていたり、アカウントが削除されていたり、無効になっていたりするインストール環境に対してもアップグレードをサポートするようになりました。インストーラは、アップグレード後のプロセスで `update.xml` をインポートできる適切なユーザー名とパスワードの入力を要求します。入力されたユーザー名とパスワードが不適切であると、3 回まで再入力を要求されます。エラー情報は、インストーラのテキストボックスに表示されません。手動によるインストールの場合は、`-U <username> -P <password>` を指定して、**UpgradePostProcess** に資格情報が渡されるようにする必要があります。

注 UNIX または Linux システムに Identity Manager をインストールする場合は、`/var/opt/sun/install` ディレクトリが存在しており、インストーラを実行するユーザーによる書き込みが可能でなければなりません。

ステージングディレクトリを利用するアプリケーションサーバーを使用する場合は、製品配備後も Identity Manager のインストールに使用したステージングディレクトリをそのまま保持してください。

- Sun Identity Manager Gateway の設定 (オプション)
- PasswordSync の設定 (オプション)

アプリケーションサーバーの種類と設定によっては、上記の一般的な手順を組み合わせて実行したり、順序を変えて行なったり、またはまったく行わない場合もあります。

インストールの前に必要な作業

Identity Manager ソフトウェアをインストールする前に、次のことを行う必要があります。

- [インデックスリポジトリファイルの格納場所を決める](#)
- [Java 仮想マシンと Java コンパイラの設定](#)
- [インデックスデータベースの設定](#)
- [次の作業](#)

インデックスリポジトリファイルの格納場所を決める

インストールプログラムを起動する前に、アプリケーションファイルを格納するディレクトリを作成する必要があります。アプリケーションファイルは、ステージングフォルダに格納するか、またはアプリケーションサーバーの Web アプリケーションディレクトリにインストールできます。

ステージングディレクトリの使用

アプリケーションは J2EE Web に基づいているので、ステージングフォルダに格納することができます。アプリケーションを専用のアプリケーションサーバーに配備するには、このステージングフォルダを使用します。通常は、Web アプリケーションアーカイブ (.war) ファイルは配備段階で使用するために作成されます。

Web アプリケーションディレクトリの使用

アプリケーションサーバーの Web アプリケーションディレクトリに直接インストールすることも選択できます。この場合、インストール時に Web アプリケーションディレクトリを指定します。インストールプログラムは、デフォルトで Identity Manager ファイルを `idm` という名前のフォルダに配置します。

注 WebSphere アプリケーションサーバー環境で `localfiles` インデックスリポジトリを使用する場合は、Identity Manager をインストールするディレクトリ以外の場所に `localfiles` リポジトリを設定します。

注 Identity Manager リポジトリとして Oracle RAC 環境を使用し、`thin` ドライバで接続する場合は、`lh` 設定の `url` パラメータとして次の書式を使用してください。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(LOAD_BALANCE=on)
(AADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=host01) (PORT=1521))) (
ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=host02) (PORT=1521))
(AADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=host03) (PORT=1521))
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=PROD)) )
```

Java 仮想マシンと Java コンパイラの設定

アプリケーションが Identity Manager 内でアクションを実行する Java クラスを動作させるには、Java コンパイラと Java 仮想マシン (JVM) が必要です。これらはどちらも Java SDK に含まれています。JRE パッケージに Java コンパイラは含まれていません。

注

- 多くのアプリケーションサーバーでは、インストールシステムに JDK がバンドルされています。アプリケーションサーバーに添付されている JDK バージョンが、ユーザーのサーバーにインストールされているほかの JDK よりも常に優先されます。
- すべての WebLogic をサポートする 1.5 JVM を持つ BEA WebLogic アプリケーションサーバー上で、Identity Manager を実行することができます。
- システム環境変数のリストとシステムパスに `JAVA_HOME` を追加するようにしてください。その場合、システム環境変数に `JAVA_HOME` を、パスに `JAVA_HOME\bin` を、それぞれほかのどの Java 変数よりも前にリストされるようにして追加します。システム環境変数のリストに `JAVA_HOME` を追加すると Identity Manager にとっては便利になります。ほかのアプリケーションへの影響が出る場合があります。

インデックスデータベースの設定

他社製のリレーショナルデータベースを使用して、システムインデックスデータを格納するようにしてください。そのことを計画している場合は、この節に説明されている一般的な手順をインデックスデータベース設定時のガイドラインとして使用してください。データベース管理者は、サイト独自の設定や標準に合わせて、提供されたスクリプトをカスタマイズすることもできます。

注意 インデックスデータをローカルファイルシステムに格納する場合は、アプリケーションサーバーや Web サーバーの配備ディレクトリ以外の場所を選択するようにします。インデックスデータ用に作成される動的ディレクトリは、Web ブラウザを使用して Web サーバーが管理するディレクトリを走査しようとする侵入者から保護することができません。

注 データベースは格納する文字をサポートする文字セットに設定する必要があります。複数バイト文字を格納する必要がある場合は、Unicode をサポートする UTF-8 などの文字セットを使用するようにします。

サンプルデータベーススクリプトについて

Identity Manager にはサンプルデータベーススクリプトが用意されており、それに変更を加えて、テーブルとインデックスを作成するために使用できます。ほかの方法で同等のテーブルとインデックスを作成することもできますが、次の要件を満たしている必要があります。

- サンプル DDL に指定された名前のテーブル (またはビュー) が存在していること。
- 名前が付けられた各テーブル (またはビュー) が、サンプル DDL で "waveset" として表されているプロキシユーザーによって所有されている (またはプロキシユーザーにエイリアス化されている) こと。
- 名前が付けられた各テーブル (またはビュー) に、サンプル DDL 内でそのテーブル用に指定されている列がすべて含まれていること。
- 名前が付けられた各列のデータ型が、サンプル DDL 内でその列に対して指定されているデータ型と整合していること。

ご使用の環境に合わせてサンプルスクリプトを変更することができます。一般には、次のような変更が行われます。

- 別のプロキシユーザーを指定する
- 別のテーブルスペースを指定する、またはテーブルとインデックスのテーブルスペースを分離する

- データ型を変更する。ビューまたは JDBC ドライバによってこの変更が透過的に処理される場合に可能です。
- 列を追加する。各列が NULL 可能であるかまたはデフォルト設定されている場合に可能です。
- 列を削除またはリネームする。ビューによってこの変更が透過的に処理される場合に可能です。
- インデックスをリネームする

注 サンプルスクリプトに変更を加える場合は、将来受け取るサンプルデータベーススクリプトすべてにも同等の変更を加える必要があります。

ファイルシステムの通常ファイルにインデックスデータを設定する場合は、**Identity Manager** のインストールに関する章に進んでください。そうでない場合は、この章の続く節に進んで、次のいずれかのデータベースを設定してください。

- MySQL
- Oracle
- DB2
- SQL Server

MySQL の設定

次の手順を行なって、**Identity Manager** とともに使用する目的で **MySQL** を設定します。

注 サポートされているデータベースサーバーのバージョンとダウンロードおよび製品の入手が可能な場所については、[1 ページの「サポートされているソフトウェアと環境」](#)を参照してください。

1. **MySQL** ソフトウェアをインストールします。**MySQL** プロセスを開始します (自動的に開始しない場合)。
2. データベースを作成します。次の手順で実行します。
 - a. `create_waveset_tables.mysql` スクリプトをインストール CD の `db_scripts` ディレクトリから (すでにインストール済みの場合は `idm\sample` から) 一時的な場所にコピーします。
 - b. `create_waveset_tables.mysql` スクリプトを修正して、データベースユーザーパスワードを変更します。

- c. 次のいずれかのコマンドを使用して、新しいテーブルを作成します。

Windows の場合

```
c:\mysql\bin\mysql -u root < create_waveset_tables.mysql
```

UNIX の場合

```
$MYSQL/bin/mysql -u root < create_waveset_tables.mysql
```

Oracle の設定

次の手順を行なって、Identity Manager とともに使用する目的で Oracle を設定します。

注 サポートされているデータベースサーバーのバージョンとダウンロードおよび製品の入手が可能な場所については、[1 ページの「サポートされているソフトウェアと環境」](#)を参照してください。

1. Oracle をインストールするか、または Oracle データベースへの接続を確認します。
2. ユーザーとテーブルを作成する特権を持つユーザーとして Oracle インスタンスに接続します。
3. データベースを作成します。次の手順で実行します。
 - a. create_waveset_tables.oracle スクリプトをインストール CD の db_scripts ディレクトリから (すでにインストール済みの場合は idm\sample から) 一時的な場所にコピーします。
 - b. create_waveset_tables.oracle スクリプトを次のように修正します。
 - ユーザーパスワードを変更します。
 - DATAFILE のパスを waveset.dbf データファイルの場所を指すように変更します。

注 データベース管理者が、バックアップ、レプリケーション、ディスク割り当て、配布、またはそれ以外の考慮事項に関するサイト固有の要件を満たすようにスクリプトを修正したほうがよいと判断する場合があります。

- c. 次のコマンドを使用して、新しいテーブルを作成します。

Windows の場合

```
sqlplus dbusername/dbapassword @create_waveset_tables.oracle
```

UNIX の場合

```
sqlplus dbusername/dbapassword @create_waveset_tables.oracle
```

DB2 の設定

DB2 を設定する前に、DB2 が JDBC アクセスを提供する方法を決めておく必要があります。

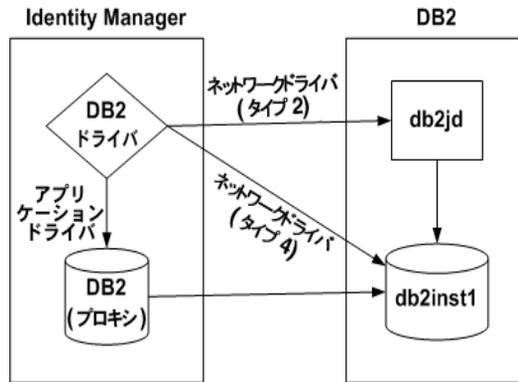
JDBC アクセスの考慮事項

DB2 には二種類の JDBC アクセスが用意されており、それぞれに必要な URL 書式は異なります。設定プロセスでは、優先ドライバを選択することができ、対応する URL テンプレートが自動的に表示されます。

アプリケーションドライバ (COM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver) は、ローカルクライアントソフトウェアとローカルデータベースインスタンスを必要とします。ほとんどの本稼働環境において DB2 は別個の (たいていは専用の) ホスト上で稼働するため、通常ローカルデータベースインスタンスにはリモートデータベースインスタンスに対する別名が含まれます。この設定では、ローカルデータベースインスタンスは DB2 固有のプロトコルを使用してリモートデータベースインスタンスと通信します。

タイプ 2 ネットワークドライバ (COM.ibm.db2.jdbc.net.DB2Driver) には、ローカルクライアントソフトウェアやローカルデータベースは必要ありません。むしろ、ターゲットサーバー上で DB2 Java デーモン (db2ja) が実行中であることが必要です。ほとんどの本稼働環境でターゲットサーバーは個別のホストですが、ネットワークドライバはローカルデータベースインスタンスとも連携します。このデーモンはデフォルトでは起動しませんが、データベース管理者が手動で開始するか、またはデータベースインスタンスが起動したときに自動的に開始するように設定することができます。

タイプ 4 ネットワークドライバ (COM.ibm.db2.jcc.DB2Driver) は DB2 データベースに直接接続します。



注 DB2 8.1.2 以上でタイプ 4 ドライバを直接接続で使用する場合は、次のドライバをダウンロードしてください。

```
com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
```

\$WSHOME/WEB-INF/lib ディレクトリに配置する必要がある次のファイル:

```
db2jcc
```

```
db2jcc_license_cisuz.jar または db2jcc_license_cu.jar
```

DB2 の設定

次の手順を行なって、DB2 を設定します。

注 サポートされているデータベースサーバーのバージョンとダウンロードおよび製品の入手が可能な場所については、[1 ページの「サポートされているソフトウェアと環境」](#)を参照してください。

1. DB2 をインストールするか、または DB2 データベースへの接続を確認します。
2. ユーザーとテーブルを作成する特権を持つユーザーとして DB2 インスタンスに接続します。
3. データベースを作成します。次の手順で実行します。
 - a. create_waveset_tables.db2 スクリプトをインストール CD の db_scripts ディレクトリから (すでにインストール済みの場合は idm\sample から) 一時的な場所にコピーします。
 - b. create_waveset_tables.db2 スクリプトを次のように修正します。
 - ユーザーパスワードを変更します。

- CREATE_TABLESPACE コマンドのパスを環境に適した場所に変更します。

注 データベース管理者が、バックアップ、レプリケーション、ディスク割り当て、配布、またはそれ以外の考慮事項に関するサイト固有の要件を満たすようにスクリプトを修正したほうがよいと判断する場合があります。

次のコマンドを使用して、新しいテーブルを作成します。

Windows の場合

```
db2 -tvf create_waveset_tables.db2
```

UNIX の場合

```
db2 -tvf create_waveset_tables.db2
```

SQL Server の設定

次の手順を行なって、SQL Server を設定します。

注 サポートされているデータベースサーバーのバージョンとダウンロードおよび製品の入手が可能な場所については、[1 ページの「サポートされているソフトウェアと環境」](#)を参照してください。

1. Microsoft SQL Server をインストールするか、またはインストール済みの SQL Server への接続を確認します。
2. データベースを作成します。次の手順で実行します。
 - a. create_waveset_tables.sqlserver スクリプトをインストール CD の db_scripts ディレクトリから (すでにインストール済みの場合は idm\sample から) 一時的な場所にコピーします。
 - b. create_waveset_tables.sqlserver スクリプトを修正して、ログインパスワードを変更します。

注 データベース管理者が、バックアップ、レプリケーション、ディスク割り当て、配布、またはそれ以外の考慮事項に関するサイト固有の要件を満たすようにスクリプトを修正したほうがよいと判断する場合があります。

- c. インストール CD に収録されている `create_waveset_tables.sqlserver` スクリプトを実行して、新しいテーブルを作成します。たとえば、次のようにします。

```
osql -E -i PathToFile\create_waveset_tables.sqlserver
```

注 データベースとログインを作成する権限を持っている必要があります。

3. Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver をダウンロードしてインストールします。次の手順で実行します。
- <http://www.microsoft.com/downloads> Web サイトにアクセスします。
 - ダウンロードの検索エリアで、キーワードフィールドに `SQL Server JDBC` と入力して、「Go」をクリックします。
 - インストール環境に適した正しいバージョンのドライバを探してダウンロードし、インストールします。

注 インストール処理中には、このドライバと `Microsoft.jar` ファイル (ドライバとともにインストールされる) をインストールするための一時停止があり、その後設定は続行します。方法については、後続の章で説明されているインストール手順を参照してください。

Service Provider トランザクションデータベースの設定

Identity Manager Service Provider をインストールする場合は、トランザクションデータを格納するデータベースを設定する必要があります。その際には、トランザクションデータベースを作成する出発点として、次のサンプルスクリプトを使用してください。

- `create_spe_tables.oracle`
- `create_spe_tables.db2`

5 ページの「インデックスデータベースの設定」に略述されている手順に従って、トランザクションデータベースを作成する作業を進めてください。

注 データベースは格納する文字をサポートする文字セットに設定する必要があります。複数バイト文字を格納する必要がある場合は、Unicode をサポートする UTF-8 などの文字セットを使用するようにします。

国際化の設定

エンコーディングの統一が取れていない場合、複数バイト文字が不正に処理されるなど、国際化の問題が生じることがあります。Identity Manager (IDM) 配備環境では、ロケールまたはエンコーディングが次のソフトウェアと一致することを確認してください。

- アプリケーションサーバーインスタンス
- データベース
- Java 仮想マシン (JVM)

英語以外の言語環境では、すべての製品を UTF-8 で統一して使用することを推奨します。

ロケールまたはエンコーディングの設定については、各製品のマニュアルを参照してください。また、CSV ファイルや XML ファイルを使用してデータをロードまたはアンロードするときには、データの完全性が保持されるように、それらのファイルのエンコーディングが Identity Manager の配備環境のエンコーディングと一致していることを確認してください。ローカリゼーションサポートの有効化については、[62 ページ](#)の「言語サポートの有効化」を参照してください。

次の作業

次のいずれかの章で説明されている手順を使用して、ご使用のアプリケーションサーバー用に Identity Manager をインストールおよび設定します。

- [23 ページ](#)の「Tomcat 用の Identity Manager のインストール手順」
- [29 ページ](#)の「WebLogic 用の Identity Manager のインストール手順」
- [35 ページ](#)の「WebSphere 用の Identity Manager のインストール手順」
- [13 ページ](#)の「Sun Application Server 用の Identity Manager のインストール手順」
- [43 ページ](#)の「JBoss 用の Identity Manager のインストール手順」

Identity Manager のインストールを開始する前に、デフォルトでは、`waveset.serverId` Java システムプロパティが、アプリケーションサーバーがインストールされているマシンの名前になっていることに注意してください。アプリケーションサーバーマシンに複数のアプリケーションサーバーがインストールされている場合など、このプロパティを別の値に設定する必要がある場合には、ご使用のアプリケーションサーバーの起動スクリプトに次のコマンドを追加します。

```
-Dwaveset.serverId=Name
```

Sun Application Server 用の Identity Manager のインストール手順

次の情報と手順を使用して、Sun Application Server Version 8 または Platform Edition 9 用に Identity Manager をインストールします。この章では、次の内容について説明します。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- Java System Application Server がインストールされている場所
- インデックスデータベースを設定したときに選択したパスワード

インストール手順

この章および後続の章で説明されている、次のインストールおよび設定の手順に従います。

- [手順 1: Sun Application Server ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: Identity Manager を Sun Application Server に配備する](#)
- [手順 4: Application Server 上の server.policy ファイルを編集する](#)
- [手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする](#)

手順 1: Sun Application Server ソフトウェアをインストールする

注 Java System Application Server インストールに関するこの章の情報は、一般的な参照用のみ提供されています。詳細については、アプリケーションサーバーソフトウェアのプロバイダが提供している Web ページまたは参照情報を参照してください。

このソフトウェアのインストール時に、次の一般的な手順の 1 つ以上の実行が必要になることがあります。

- Java System Application Server の標準インストールを使用します。
- インストールディレクトリの場所を指定します。
- Application Server 管理のための管理者の名前とパスワードを指定します。

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

1. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。
 - インストーラをグラフィカルユーザーインターフェイスで使用する方法
install.bat (Windows の場合) または install (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。
インストールメディアから独自の場所にファイルをコピーする場合は、idm.war ファイルと install.class ファイルが同じディレクトリ内にある必要があります。
インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。
 - インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェイスで使用する方法 (UNIX の場合のみ)
UNIX システムの場合は、ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、nodisplay モードでインストーラを起動します。

```
install -nodisplay
```

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェースの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで `nodisplay` オプションを使用します。DISPLAY 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

2. 「**Next**」をクリックします。インストーラの「Install or Upgrade?」パネルが表示されます。
3. 「New Installation」オプションを選択した状態で、「**Next**」をクリックします。インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。
4. 表示されたディレクトリの場所を、Identity Manager をインストールする場所に置き換えます。この場所は、ステージングの場所にするこも、特定のフォルダにすることもできます。場所を入力するか、または「**Browse**」をクリックして場所を選択し、「**Next**」をクリックします。

注 入力したディレクトリが存在しない場合は、Identity Manager によって確認のメッセージが表示されたあと、ディレクトリが作成されます。

5. 「**Install Now**」をクリックしてインストールを開始します。
ファイルがインストールされると、Identity Manager の「Launch Setup」パネルが表示されます。

注意 インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、`idm\WEB-INF\lib` ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (DriverManager 接続の場合)、または JNDI InitialContextFactory を含む JAR ファイル (データソース接続の場合) を `idm\WEB-INF\lib` へ置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」を参照してください。終了したら、「**Launch Setup**」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「**Launch Setup**」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、`lh setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

6. 「Setup Wizard」パネルの「**Next**」をクリックします。
インストーラの「Locate the Repository」パネルが表示されます。
7. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

選択項目および設定の手順については、75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」を参照してください。
8. 「**Next**」をクリックします。
9. 「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルが表示されます。
10. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。手順 19 に進んでください。
11. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。

これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。
12. 次の個人情報を入力します。
 - 名
 - 姓
 - 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、Configurator 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

13. 次の承認者情報を入力します。
 - 承認者名
 - 承認者パスワード
14. 「**Next**」をクリックします。
15. 「**Server Type**」をリストから選択します。

使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。
16. 電子メールの SMTP サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。

17. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。
18. 「**Next**」をクリックします。
19. インストーラの「**Save Configuration**」パネルが表示されます。
20. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。
21. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。
22. アプリケーションサーバーが UNIX マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを \$WSHOME/bin ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリでスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```

詳細情報の入手

インストールが完了すると、インストーラの「**Installation Summary**」パネルが表示されます。インストールに関する詳細情報を表示するには、「**Details**」をクリックします。

ここにはすべてのメッセージが表示されない可能性があります。詳細については、指定されているログファイルを表示してください。

完了したら、「**Close**」をクリックしてインストーラを終了します。

インストールが完了したら、オプションで Sun Identity Manager Gateway のインストールに進みます。

手順 3: Identity Manager を Sun Application Server に配備する

次の手順を実行して、Identity Manager アプリケーションを Sun Application Server に配備します。

1. コマンドプロンプトを開き、Identity Manager ファイルをインストールしたステージングディレクトリに移動します。これは、「[手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)」の[手順 4](#)で指定したディレクトリです。
2. `jar.exe` (Windows の場合) または `jar` (UNIX の場合) コマンドを使用して、Identity Manager ファイルを含む `.war` ファイルを作成します。

```
c:\>java1.5\bin\jar.exe cvf ../idm.war *
/usr/bin/>jar cvf ../idm.war *
```
3. アプリケーションサーバーを起動し、Java System Application Server 管理コンソールにログインします。
4. 左のパネルにある「アプリケーション」フォルダに移動し、そのフォルダを展開します。
5. 「Web アプリケーション」フォルダをクリックします。
6. 右のパネルにある「**配備 ...**」をクリックします。
7. `idm.war` ファイルのファイルパスを入力し、「**次へ**」をクリックします。
8. プロンプトが表示されたら、「アプリケーション名」を「`idm`」に設定します。「コンテキストルート」を「`/idm`」に設定し、「**了解**」をクリックします。
9. Platform Edition 9 上に配備している場合は、次の手順を実行して、Identity Manager 内にリソースを作成できることを確認します。
 - a. 管理コンソールの左の区画にある「アプリケーションサーバー」リンクをクリックします。
 - b. 「**JVM 設定**」タブを選択し、「**JVM オプション**」タブを選択します。
 - c. 「**JVM オプションを追加**」をクリックします。
 - d. 「**値**」列の空白のボックスに次の行を追加します。

```
-Dcom.sun.enterprise.server.ss.ASQuickStartup=false
```
 - e. 「**保存**」をクリックします。
10. アプリケーションサーバーを再起動しないでください。「[手順 4: Application Server 上の server.policy ファイルを編集する](#)」を続行します。

手順 4: Application Server 上の server.policy ファイルを編集する

Identity Manager に特定の操作を実行するためのアクセス権が許可されている必要があります。

1. Identity Manager がインストールされているドメインの server.policy ファイル (*ApplicationServerHome/domains/domainName/config* に格納されている) に次の行を追加します。\${waveset.home} 変数が server.policy ファイルに展開されている必要があります。

```
grant {
permission java.lang.RuntimePermission "accessClassInPackage.sun.io";
permission java.lang.RuntimePermission "getClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "createClassLoader";
permission java.lang.RuntimePermission "accessDeclaredMembers";
permission com.waveset.repository.test.testConcurrentLocking "read";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect,resolve";
permission java.io.FilePermission "*", "read";
permission java.util.PropertyPermission "*", "read,write";
};

grant codeBase "file:${waveset.home}/-" {
permission java.util.PropertyPermission "waveset.home", "read,write";
permission java.util.PropertyPermission "security.provider", "read,write";
permission java.io.FilePermission "${waveset.home}${/} *", "read,write,execute";
permission java.io.FilePermission "${waveset.home}/help/index/-",
"read,write,execute,delete";
permission java.io.FilePermission "${java.io.tmpdir}${/}*", "read,write,delete";
permission java.util.PropertyPermission "*", "read,write";
permission java.lang.RuntimePermission "accessClassInPackage.sun.io";
permission java.net.SocketPermission "*", "connect,resolve";
};
```

Identity Manager Service Provider を配備する場合は、上の server.policy ファイルのエントリに次のアクセス権を追加します。

```
grant {
permission java.lang.RuntimePermission "shutdownHooks";
permission java.io.FilePermission "${waveset.home}/WEB-INF/spe/config/spe.tld", "read";
};
```

注 Server.policy ファイルを上で指定した内容で更新せずに、検索エンジンを使用しようとする、インデックスディレクトリ内に、コンテナでは削除できないロックファイルが作成される可能性があります。この状態が発生すると、その後 **server.policy** ファイルが更新されたとしても、クエリーが常にハングアップします。

たとえば、**help/index/docs** ディレクトリの内容に、次の5つのファイルが含まれていることがあります。

```
AL
MF
p1.dict
p1.fields
p1.post
```

上のファイルに加えて、次の2つのロックファイルが存在する可能性があります。

```
AL.lock
MF.lock
```

これらのファイルを手動で削除する必要があります。これらのファイルが削除され、**server.policy** ファイルが正しく更新されると、検索クエリーが予期したとおりに機能します。

トレースをファイルに書き込むように設定して実行する場合は、**server.policy** ファイルに次のアクセス権を追加する必要があります。

```
grant {
    permission java.io.FilePermission
"/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/
idm/config/trace1.log", "read,write";
    permission java.io.FilePermission "${java.io.tmpdir}${/}*";
    permission java.util.PropertyPermission "trace.file", "read";
    permission java.util.PropertyPermission "trace.destination", "read";
    permission java.util.PropertyPermission "trace.enabled", "read";
};
```

ここで、**FilePermission** はトレースファイルの実際のパスです。出力ファイルへのパスを必要に応じて調整します。

2. アプリケーションサーバーを再起動します。
3. セットアップを確認するには、**Identity Manager** にログインします。管理コンソールで、「**Web アプリケーション**」フォルダの「**idm**」行にある「**起動**」ボタンをクリックします。

手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「[Sun Identity Manager Gateway のインストール手順](#)」の手順に従います。

Tomcat 用の Identity Manager の インストール手順

次の情報と手順を使用して、Apache Tomcat アプリケーションサーバー用に Identity Manager をインストールします。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- Tomcat がインストールされている場所
- インデックスデータベースをセットアップしたときに選択したログインとパスワード

インストール手順

次のインストールおよび設定の手順を行います。

- [手順 1: Tomcat ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする](#)

手順 1: Tomcat ソフトウェアをインストールする

注 この章で略述されている Tomcat のインストール手順は、一般的な参照用
にのみ提供されています。Tomcat のインストールの詳細については、ア
プリケーションサーバーソフトウェアのプロバイダが提供している Web
ページまたは参照情報を参照してください。

アプリケーションサーバープロバイダが提供している手順に従って、Tomcat ソフト
ウェアをインストールします。Jakarta Project サイト
(<http://jakarta.apache.org/tomcat/>) には役立つ情報があります。

Windows 上でのインストール

Tomcat インストーラからインストールする場合は、次の操作を行います。

1. Tomcat のインストール場所を指定します。
2. Tomcat をサービスとして開始することを選択し、実行時に使用するポート番号を
選択します。デフォルトのポートは 8080 です。

UNIX 上でのインストール

1. Tomcat インストールバンドルをダウンロードして展開した後、次の手順で
Tomcat 起動スクリプトを修正します。

\$TOMCAT_HOME/bin ディレクトリにある setclasspath.sh ファイルの先頭に、次
の行を追加します。

```
JAVA_HOME=JDK の場所  
BASEDIR= 展開した Tomcat がある場所  
export JAVA_HOME BASEDIR
```

2. UTF-8 をサポートするように Tomcat を設定するには、次の例のようにして、
TOMCAT DIR/conf/server.xml ファイルの *connector* 要素に URIEncoding="UTF-8"
属性を追加します。

```
<!-- Define a non-SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on the port specified  
during installation -->  
<Connector port="8080"  
  maxThreads="150"  
  minSpareThreads="25"  
  maxSpareThreads="75"  
  enableLookups="false" redirectPort="8443"  
  acceptCount="100" debug="0" connectionTimeout="20000"  
  disableUploadTimeout="true"  
  URIEncoding="UTF-8" />
```

3. UTF-8 をサポートするように Tomcat を設定する場合は、`java vm` オプションに `-Dfile.encoding=UTF-8` も追加します。

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

1. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。
 - インストーラをグラフィカルユーザーインターフェースで使用方法
`install.bat` (Windows の場合) または `install` (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。

インストールメディアから独自の場所にファイルをコピーする場合は、`idm.war` ファイルと `install.class` ファイルが同じディレクトリ内にある必要があります。

インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。
 - インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェースで使用方法 (UNIX の場合のみ)

Identity Manager ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、`nodisplay` モードでインストーラを起動します。

```
install -nodisplay
```

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェースの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで `nodisplay` オプションを使用します。DISPLAY 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

2. 「次へ」をクリックして、「Install or Upgrade?」パネルを表示します。
3. 「New Installation」オプションを選択した状態で、「次へ」をクリックします。
インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。

- 表示されたディレクトリの場所を、**Identity Manager** をインストールする場所に置き換えます。この場所は、**ステージングの場所**にすることも、**特定のフォルダ**にすることもできます。場所を入力するか、または「**Browse**」をクリックして場所を選択し、「**次へ**」をクリックします。

注

- Tomcat の `server.xml` ディレクトリに新規コンテキスト (仮想ディレクトリ) を作成しない場合は、`%TOMCAT_HOME%\webapps\idm` にインストールすることをお勧めします。
 - 入力したディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって確認のメッセージが表示されたあと、ディレクトリが作成されます。
-

- 「**Install Now**」をクリックしてインストールを開始します。

ファイルがインストールされると、インストーラの「**Launch Setup**」パネルが表示されます。

- `$WSHOME/WEB-INF/lib` ディレクトリに **Java** の `mail.jar`、`activation.jar`、および `jms.jar` ファイルを追加します。これらのファイルは、次の場所にあります。

<http://java.sun.com/products/javamail>

<http://java.sun.com/products/beans/glasgow/jaf.html>

<http://java.sun.com/products/jms/index.jsp>

注意

インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、`idm/WEB-INF/lib` ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、**JDBC** ドライバを含む **JAR** ファイル (**DriverManager** 接続の場合)、または **JNDI InitialContextFactory** を含む **JAR** ファイル (データソース接続の場合) を `idm/WEB-INF/lib` へ置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、**75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」** を参照してください。終了したら、「**Launch Setup**」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「**Launch Setup**」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、`lh setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

- 「**Setup Wizard**」パネルの「**次へ**」をクリックします。

製品の「**Locate the Repository**」パネルが表示されます。

8. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。
選択項目および設定の手順については、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。
9. 「次へ」をクリックします。
10. 「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルが表示されます。
11. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。手順 20 に進んでください。
12. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。
これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。
13. 次の個人情報を入力します。
 - 名
 - 姓
 - 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、Configurator 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

14. 次の承認者情報を入力します。
 - 承認者名
 - 承認者パスワード
15. 「次へ」をクリックします。
16. 「**Server Type**」をリストから選択します。
使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。
17. 電子メールの SMTP サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。
18. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。
19. 「次へ」をクリックします。

20. インストーラの「Save Configuration」パネルが表示されます。
21. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。
22. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。
23. アプリケーションサーバーが UNIX マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを \$WSHOME/bin ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリのスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```

詳細情報の入手

インストールが完了すると、インストーラの「Installation Summary」パネルが表示されます。インストールに関する詳細情報を表示するには、「**Details**」をクリックします。

ここには一部のメッセージが表示されない可能性があります。詳細については、指定されているログファイルを表示してください。

完了したら、「**Close**」をクリックしてインストーラを終了します。

手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「[Sun Identity Manager Gateway のインストール手順](#)」の手順に従います。

WebLogic 用の Identity Manager の インストール手順

BEA WebLogic アプリケーションサーバーとともに使用する目的で Identity Manager をインストールするには、次の情報および手順を使用してください。この章では、次の内容について説明します。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- WebLogic がインストールされている場所
- WebLogic ドメイン名
- インデックスデータベースを設定したときに選択したパスワード

インストール手順

この章および後続の章で説明されている、次のインストールおよび設定の手順に従います。

- [手順 1: WebLogic ソフトウェアを設定する](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: アプリケーションを配備する](#)
- [手順 4: IIS のデフォルトドキュメントにアプリケーションのメインページを追加する \(オプション\)](#)

- 手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

手順 1: WebLogic ソフトウェアを設定する

1. WebLogic をインストールし、ソフトウェアのインストール時に参照されるドメインを選択します。
2. 環境変数 JAVA_HOME および WSHOME を設定します。

```
set JAVA_HOME=/PathTo/java  
set WSHOME=Path To IDMDirectory
```

注 WSHOME 環境変数の値に次の文字が含まれないようにしてください。

- 二重引用符 ("")
- パスの末尾にスラッシュまたはバックスラッシュ (/ または \)

アプリケーションの配備ディレクトリへのパスにスペースが含まれている場合でも、二重引用符を使用しないでください。

3. WebLogic 9.1 以上の場合のみ、Java の mail.jar および activation.jar ファイルを \$WSHOME/WEB-INF/lib ディレクトリに追加します。これらのファイルは、次の場所にあります。

<http://java.sun.com/products/javamail>

<http://java.sun.com/products/beans/glasgow/jaf.html>

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

1. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。
 - インストーラをグラフィカルユーザーインターフェースで使用する方法

install.bat (Windows の場合) または install (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。

インストールメディアから独自の場所にファイルをコピーする場合は、idm.war ファイルと install.class ファイルが同じディレクトリ内にある必要があります。

インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。

- インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェースで使用方法 (UNIX の場合のみ)

UNIX システムの場合は、Identity Manager ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、**nodisplay** モードでインストーラを起動します。

```
install -nodisplay
```

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェースの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで **nodisplay** オプションを使用します。DISPLAY 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

2. 「Next」をクリックします。インストーラの「Install or Upgrade?」パネルが表示されます。
3. 「New Installation」オプションを選択した状態で、「Next」をクリックします。インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。
4. 表示されたディレクトリの場所を、Identity Manager をインストールする場所に置き換えます。この場所は、ステージングの場所にすることも、特定のフォルダにすることもできます。場所を入力するか、または「Browse」をクリックして場所を選択し、「Next」をクリックします。

注

- 入力したディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって確認のメッセージが表示されたあと、ディレクトリが作成されます。
- WebLogic Web アプリケーションのホームディレクトリは、`ServerHome/user_projects/domains/DomainName/autodeploy` です。

5. 「Install Now」をクリックしてインストールを開始します。

ファイルがインストールされると、インストーラの「Launch Setup」パネルが表示されます。

注意 インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、`idm\WEB-INF\lib` ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (`DriverManager` 接続の場合)、または `JNDI InitialContextFactory` を含む JAR ファイル (データソース接続の場合) を `idm\WEB-INF\lib` へ置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。終了したら、「**Launch Setup**」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「**Launch Setup**」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、`lh setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

6. 「Setup Wizard」パネルの「**Next**」をクリックします。
 インストーラの「**Locate the Repository**」パネルが表示されます。
7. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。
 選択項目および設定の手順については、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。
8. 「**Next**」をクリックします。
9. 「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルが表示されます。
10. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。[手順 19](#)に進んでください。
11. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。
 これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。
12. 次の個人情報を入力します。
 - 名
 - 姓
 - 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、Configurator 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

13. 次の承認者情報を入力します。
 - 承認者名
 - 承認者パスワード
14. 「**Next**」をクリックします。
15. 「**Server Type**」をリストから選択します。

使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。
16. 電子メールの **SMTP** サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。
17. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。
18. 「**Next**」をクリックします。
19. インストーラの「**Save Configuration**」パネルが表示されます。
20. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。
21. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。
22. アプリケーションサーバーが **UNIX** マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを `$WSHOME/bin` ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリのスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```
23. **Cryptix JAR** ファイル (`cryptix-jce-api.jar` と `cryptix-jce-provider.jar`) を `%WSHOME%\WEB-INF\lib` ディレクトリから削除します。

注 **Cryptix JAR** ファイルは組み込まれなくなり、サポートされなくなります。上記のファイルをまだ削除していない場合は、削除する必要があります。 `Waveset.properties` ファイルがカスタマイズされている場合には、 `security.jce.workaround` プロパティが `false` に設定されているか、または削除されていることを確認してください。このプロパティが `true` に設定されていると、プロパティの意図が実現されないため、例外がスローされます。

詳細情報の入手

インストールが完了すると、インストーラの「Installation Summary」パネルが表示されます。インストールに関する詳細情報を表示するには、「Details」をクリックします。

ここにはすべてのメッセージが表示されない可能性があります。詳細については、指定されているログファイルを表示してください。

完了したら、「Close」をクリックしてインストーラを終了します。

インストーラによるインストールが正常に完了したら、引き続き WebLogic サーバーを設定してください。

手順 3: アプリケーションを配備する

デフォルトでは、WebLogic は applications または autodeploy ディレクトリから自動で配備します。自動配備が有効になっていない場合は、WebLogic コンソールを使用して Identity Manager を配備してください。

手順 4: IIS のデフォルトドキュメントにアプリケーションのメインページを追加する (オプション)

Internet Information Server (IIS) を Web サーバーとして使用している場合は、IIS の Identity Manager 仮想ディレクトリの「既定のドキュメント」のリスト(「プロパティ」の下)に index.html を追加する必要があります。そうしないと、Identity Manager サーバーにアクセスしたときに、Identity Manager のメインページが正しく解決されません。

手順 5: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「Sun Identity Manager Gateway のインストール手順」の手順に従います。

WebSphere 用の Identity Manager の インストール手順

次の情報と手順を使用して、IBM WebSphere アプリケーションサーバー用に Identity Manager をインストールします。この章では、次の内容について説明します。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- WebSphere がインストールされている場所
- インデックスデータベースを設定したときに選択したパスワード

インストール手順

この章および後続の章で説明されている、次のインストールおよび設定の手順に従います。

- [手順 1: Application Server を準備する](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: Application Server を設定する](#)
- [手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする](#)

ここでの手順では、アプリケーションサーバーとサーブレットエンジンが WebSphere でセットアップ済みであることを前提にしています。WebSphere のインストールおよび使用の詳細については、アプリケーションサーバーソフトウェアのプロバイダが提供している Web ページまたは参照情報を参照してください。

手順 1: Application Server を準備する

次の手順を使用して、Identity Manager 用のアプリケーションサーバーを準備します。

1. インストールメディアのベースディレクトリにある idm.war ファイルを idm_staging フォルダにコピーします。

2. idm_staging フォルダの idm.war ファイルを解凍します。

```
jar -xvf idm.war
```

3. 環境変数 JAVA_HOME および WSHOME を設定します。

```
set JAVA_HOME=c:\Program Files\WebSphere\AppServer\java
set WSHOME=Path To IDMStaging Directory
```

注 WSHOME 環境変数の値に次の文字が含まれないようにしてください。

- 二重引用符 (" ")
- パスの末尾にスラッシュまたはバックスラッシュ (/ または \)

アプリケーションの配備ディレクトリへのパスにスペースが含まれている場合でも、二重引用符を使用しないでください。

4. インデックスデータベースの使用を計画している場合は、idm\WEB-INF\lib ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、[75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」](#)を参照してください。完了したなら、**setup** を起動してインストールを続行します。

注意 インデックスデータベースファイルをコピーする前に **setup** を起動すると、設定が正常に続行しなくなります。ファイルをコピーしてから、`lh setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直してください。

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

次の手順を使用して、アプリケーションサーバー上に Identity Manager をインストールします。

1. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。
 - インストーラをグラフィカルユーザーインターフェースで使用する方法
install.bat (Windows の場合) または install (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。
インストールメディアから独自の場所にファイルをコピーする場合は、idm.war ファイルと install.class ファイルが同じディレクトリ内にある必要があります。
インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。
 - インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェースで使用する方法 (UNIX の場合のみ)

Identity Manager ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、nodisplay モードでインストーラを起動します。

```
install -nodisplay
```

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェースの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで nodisplay オプションを使用します。DISPLAY 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

2. 「Next」をクリックして、「Install or Upgrade?」パネルを表示します。
3. 「New Installation」オプションを選択した状態で、「Next」をクリックします。
インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。
4. 表示されたディレクトリの場所を、Identity Manager をインストールする場所に置き換えます。この場所は、ステージングの場所にするこも、特定のフォルダにするこもできます。場所を入力するか、または「Browse」をクリックして場所を選択し、「Next」をクリックします。

5. 「**Install Now**」をクリックしてインストールを開始します。
ファイルがインストールされると、インストーラの「**Launch Setup**」パネルが表示されます。
6. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

注意

インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、`idm/WEB-INF/lib` ディレクトリへの1つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (DriverManager 接続用) または JNDI InitialContextFactory を含む JAR ファイル (データソース接続用) を置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、[75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」](#)を参照してください。Data Source をリポジトリの場所として使用することを計画している場合は、[79 ページの「Identity Manager のデータソースの設定」](#)で説明されている特別な手順を参照してください。

終了したら、「**Launch Setup**」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「**Launch Setup**」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、`ln setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

7. 「**Setup Wizard**」パネルの「**Next**」をクリックします。
製品の「**Locate the Repository**」パネルが表示されます。
8. 表示されるオプションのリストからインデックスデータベースを選択します。
選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

注

選択項目および設定の手順については、[75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」](#)を参照してください。

9. 「**Next**」をクリックします。
10. 「**Continue Identity Manager Demo Setup?**」パネルが表示されます。
11. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。[手順 20](#)に進んでください。
12. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。

これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。

13. 次の個人情報を入力します。

- 名
- 姓
- 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、Configurator 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

14. 次の承認者情報を入力します。

- 承認者名
- 承認者パスワード

15. 「**Next**」をクリックします。

16. 「**Server Type**」をリストから選択します。

使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。

17. 電子メールの **SMTP** サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。

18. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。

19. 「**Next**」をクリックします。

20. インストーラの「**Save Configuration**」パネルが表示されます。

21. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。

22. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。

23. アプリケーションサーバーが UNIX マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを \$WSHOME/bin ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリのスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```

手順 3: Application Server を設定する

次の手順を使用して、WebSphere を設定します。

注 次の手順では、Integrated Solutions Console, Version 6.1 を使用します。設定手順は、Integrated Solutions Console の他のバージョンと異なる場合があります。

1. 次のファイルがあればそれを削除します。

- WEB-INF/lib/log.jar
- WEB-INF/lib/j2ee.jar
- WEB-INF/lib/ldap.jar

2. WSHOME から .war ファイルを作成します。

```
jar -cvf idm.war *
```

3. アプリケーションサーバーを起動します。この操作は WebSphere のスクリプトを使用して行う必要があります。たとえば、WebSphere バイナリファイルが `c:\Program Files\WebSphere\AppServer\bin` にインストールされており、アプリケーションサーバーに `server1` という名前が付けられている場合は、次のようになります。

```
cd c:\Program Files\WebSphere\AppServer\bin
```

```
startServer.bat server1
```

4. WebSphere Integrated Solutions Console を起動してから、次の選択をします。「アプリケーション」->「新規アプリケーションのインストール」「アプリケーション・インストールの準備」パネルが表示されます。
 - a. ローカルまたはリモートファイルシステムフィールドに `idm.war` ファイルのフルパスを追加します。
 - b. Identity Manager インストール環境のコンテキストルートのパス (`/idm` など) を追加します。
 - c. すべてのインストールオプションとパラメータを表示するオプションを選択します。「次へ」をクリックします。新しいパネルが表示されます。
5. 「デフォルトバインディングの生成」オプションを選択します。「オーバーライド」と「仮想ホスト」に関してはデフォルトの選択を使用します。「次へ」をクリックします。
6. 「アプリケーション・セキュリティ警告」の見出しの下に表示されている `was.policy` ファイルを受け入れます。このファイルの最後までスクロールし、「**継続**」ボタンをクリックします。

7. 必要に応じて、「**ステップ 1: インストールオプションの選択**」ページで設定を行います。
 - アプリケーションを WebSphere のデフォルトの場所ではない別の場所にインストールすることを希望する場合は、「**アプリケーションをインストールするディレクトリ**」フィールドにアプリケーションをインストールするパスを入力します。たとえば、次のようにします。


```
c:\Program Files\WebSphere\AppServer\installedApps\Hostname
```
 - 「**分散アプリケーション**」オプションと「**バイナリー構成の使用**」オプションが選択されていることを確認してください。
 - 「**リソース用の MBean の作成**」オプションと「**デプロイ Enterprise Beans**」オプションが選択されていないことを確認してください。
 - 「**アプリケーション名**」フィールドにアプリケーションの名前を入力します(デフォルトは idm)。
 - 必要に応じて、「**クラスの再ロードを使用可能にする**」オプションを選択します。このダイアログを設定した後、「**次へ**」をクリックします。
8. 「**ステップ 2: モジュールをサーバーにマップ**」パネルに Identity Manager の現在のリリースが表示されるので、適切なサーバーにマップされていることを確認します。「**ステップ 6: Web モジュールの仮想ホストをマップ**」をクリックします。
9. 「**ステップ 6: Web モジュールの仮想ホストをマップ**」パネルに Identity Manager の現在のリリースが表示されるので、適切な仮想ホストにマップされていることを確認して、「**ステップ 8: 要約**」をクリックします。
10. インストールオプションの要約の一覧を見直してから、「**終了**」をクリックします。
11. Identity Manager がインストールされたあと、「**マスター構成に保管**」をクリックして、設定を保存します。
12. 「**保管**」をクリックして、パネルのページがクリアされるのを待ちます。
13. Identity Manager アプリケーションを停止します。
14. WAS_ROOT/profiles//*ProfileName*//installedApps//*nodename*///*EnterpriseAppName*///idm.war/WEB-INF/ibm-web-ext.xml ファイルに、次の行を追加します。


```
<jspAttributes xmi:id="JSPAttribute_1" name="jdkSourceLevel" value="15"/>
```

 この行により、アプリケーションサーバーが Java 5 の JSP ファイルをコンパイルします。
15. Identity Manager を再起動します。

手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「[Sun Identity Manager Gateway のインストール手順](#)」の手順に従います。

JBoss 用の Identity Manager の インストール手順

次の情報と手順を使用して、JBoss アプリケーションサーバー用に Identity Manager をインストールします。この章では、次の内容について説明します。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- JBoss がインストールされている場所
- インデックスデータベースをセットアップしたときに選択したログインとパスワード

インストール手順

次のインストールおよび設定の手順を行います。

- [手順 1: JBoss ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする](#)

手順 1: JBoss ソフトウェアをインストールする

注 JBoss インストールの概要を説明したこの章の手順は、一般的な参照用にもみ提供されています。JBoss のインストールの詳細については、アプリケーションサーバーソフトウェアのプロバイダが提供している Web ページまたは参照情報を参照してください。

アプリケーションサーバープロバイダが提供している手順に従って、JBoss ソフトウェアをインストールします。JBoss Project サイト (<http://labs.jboss.com/portal/jbossas>) で役立つ情報を検索できる可能性があります。このソフトウェアのインストール時に、次の一般的な手順の 1 つ以上の実行が必要になることがあります。

- 完全な JBoss アプリケーションサーバーをインストールします。
- JBoss のインストールパスにスペースが含まれていないことを確認します。
- Application Server 管理のための管理者の名前とパスワードを指定します。
- UTF-8 をサポートするように JBoss を設定する場合は、*InstallDir*\server\default\deploy\jbossweb-tomcat55.sar\server.xml ファイル内の Connector 要素に `URIEncoding="UTF-8"` 属性を追加します。たとえば、次のようにします。

```
<!-- A HTTP/1.1 Connector on port 8080 -->
<Connector port="17001" address="{jboss.bind.address}"
  maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"
  emptySessionPath="true" enableLookups="false" redirectPort="8443"
  acceptCount="100" connectionTimeout="20000"
  disableUploadTimeout="true" URIEncoding="UTF-8" />
```

- UTF-8 をサポートするように JBoss を設定する場合は、Java VM オプションに `-Dfile.encoding=UTF-8` も追加します。
- JBoss PermGen スペースを拡大して、メモリー不足エラーを回避します。たとえば、次の引数を `JAVA_OPTS` 環境変数に追加して、スペースを 128M バイトに拡大します。

```
-XX:PermSize=128m -XX:MaxPermSize=128m
```

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

1. 環境変数 `JAVA_HOME` および `WSHOME` を設定します。

```
set JAVA_HOME=/PathTo/java
set WSHOME=Path To IDM Directory
```

注 `WSHOME` 環境変数の値に次の文字が含まれないようにしてください。

- 二重引用符 (" ")
- パスの末尾にスラッシュまたはバックスラッシュ (/ または \)

アプリケーションの配備ディレクトリへのパスにスペースが含まれている場合でも、二重引用符を使用しないでください。

2. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。

- インストーラをグラフィカルユーザーインターフェイスで使用する方法

`install.bat` (Windows の場合) または `install` (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。

インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。

- インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェイスで使用する方法 (UNIX の場合のみ)

Identity Manager ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、`nodisplay` モードでインストーラを起動します。

```
install -nodisplay
```

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェイスの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで `nodisplay` オプションを使用します。`DISPLAY` 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

3. 「Next」をクリックして、「Install or Upgrade?」パネルを表示します。

4. 「New Installation」 オプションを選択した状態で、「Next」をクリックします。
インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。
5. 表示されたディレクトリの場所をステージングディレクトリに置き換えます。場所を入力するか、または「Browse」をクリックして場所を選択し、「Next」をクリックします。

注 入力したディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって確認のメッセージが表示されたあと、ディレクトリが作成されます。

6. 「Install Now」をクリックしてインストールを開始します。
ファイルがインストールされると、インストーラの「Launch Setup」パネルが表示されます。
7. \$WSHOME/WEB-INF/lib ディレクトリに Java の mail.jar および activation.jar ファイルを追加します。これらのファイルは、次の場所にあります。
<http://java.sun.com/products/javamail>
<http://java.sun.com/products/beans/glasgow/jaf.html>

注意 インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、idm\WEB-INF\lib ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (DriverManager 接続の場合)、または JNDI InitialContextFactory を含む JAR ファイル (データソース接続の場合) を idm/WEB-INF/lib へ置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」を参照してください。Data Source をリポジトリの場所として使用することを計画している場合は、79 ページの「Identity Manager のデータソースの設定」で説明されている特別な手順を参照してください。

終了したら、「Launch Setup」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「Launch Setup」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、lh setup コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

8. 「Setup Wizard」パネルの「Next」をクリックします。
製品の「Locate the Repository」パネルが表示されます。

9. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

選択項目および設定の手順については、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。
10. 「**Next**」をクリックします。
11. 「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルが表示されます。
12. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。手順 21 に進んでください。
13. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。

これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。
14. 次の個人情報を入力します。
 - 名
 - 姓
 - 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、Configurator 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

15. 次の承認者情報を入力します。
 - 承認者名
 - 承認者パスワード
16. 「**Next**」をクリックします。
17. 「**Server Type**」をリストから選択します。

使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。
18. 電子メールの SMTP サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。
19. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。
20. 「**Next**」をクリックします。

21. インストーラの「**Save Configuration**」パネルが表示されます。
22. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。
23. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。

インストールが完了すると、インストーラの「**Installation Summary**」パネルが表示されます。インストールに関する詳細情報を表示するには、「**Details**」をクリックします。

ここにはすべてのメッセージが表示されない可能性があります。詳細については、指定されているログファイルを表示してください。

完了したら、「**Close**」をクリックしてインストーラを終了します。
24. `WSHOME` から `.war` ファイルを作成します。

```
jar -cvf idm.war *
```
25. `idm.jar` ファイルを `JBoss deploy` ディレクトリにコピーします。たとえば、`InstallDir\server\default\deploy` です。
26. アプリケーションサーバーが `UNIX` マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを `$WSHOME/bin` ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリのスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```

手順 3: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「[Sun Identity Manager Gateway のインストール手順](#)」の手順に従います。

Oracle Application Server 10g 用の Identity Manager のインストール手順

次の情報と手順を使用して、Oracle Application Server 10g リリース 3 用に Identity Manager をインストールします。この章では、次の内容について説明します。

- [開始する前に](#)
- [インストール手順](#)

開始する前に

インストール中に、次の情報が必要になります。

- Oracle Application Server がインストールされている場所
- インデックスデータベースを設定したときに選択したパスワード

インストール手順

この章および後続の章で説明されている、次のインストールおよび設定の手順に従います。

- [手順 1: Oracle Application Server ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)
- [手順 3: Identity Manager を Oracle Application Server に配備する](#)
- [手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする](#)

手順 1: Oracle Application Server ソフトウェアをインストールする

注 Oracle Application Server インストールに関するこの章の情報は、一般的な参照用にのみ提供されています。詳細については、アプリケーションサーバーソフトウェアのプロバイダが提供している Web ページまたは参照情報を参照してください。

このソフトウェアのインストール時に、次の一般的な手順の 1 つ以上の実行が必要になることがあります。

- Oracle Enterprise Manager 10g Application Server の標準インストールを使用します。
- インストールディレクトリの場所を指定します。
- Application Server 管理のための管理者の名前とパスワードを指定します。

手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする

1. 次の 2 つの方法のいずれかを使用して、Identity Manager ソフトウェアをインストールできます。
 - インストーラをグラフィカルユーザーインターフェースで使用する方法
install.bat (Windows の場合) または install (UNIX の場合) コマンドを実行して、インストールプロセスを起動します。

インストールメディアから独自の場所にファイルをコピーする場合は、idm.war ファイルと install.class ファイルが同じディレクトリ内にある必要があります。

インストーラの「Welcome」パネルが表示されます。
 - インストーラを非グラフィカルユーザーインターフェースで使用する方法 (UNIX の場合のみ)

UNIX システムの場合は、ソフトウェアをインストールするディレクトリに移動します。次のコマンドを入力して、nodisplay モードでインストーラを起動します。

install -nodisplay

インストーラの「Welcome」テキストが表示されます。「Next」をクリックします。次に、インストーラはインストール情報を収集するための一連の質問を、グラフィカルユーザーインターフェースの場合と同じ順序で示します。

注 ディスプレイ環境がない場合は、インストーラはデフォルトで `nodisplay` オプションを使用します。DISPLAY 環境変数は有効な X サーバーに設定する必要があります。これを設定しないと、インストールが失敗することがあります。

2. 「Next」をクリックします。インストーラの「Software License Agreement」ページが表示されます。契約をよく読み、同意する場合は、「Yes (Accept License)」ボタンをクリックします。インストーラの「Install or Upgrade?」パネルが表示されます。
3. 「New Installation」オプションを選択した状態で、「Next」をクリックします。インストーラの「Select Installation Directory」パネルが表示されます。
4. 表示されたディレクトリの場所を、Identity Manager をインストールする場所に置き換えます。この場所は、ステージングの場所にすることも、特定のフォルダにすることもできます。場所を入力するか、または「Browse」をクリックして場所を選択し、「Next」をクリックします。

注 入力したディレクトリが存在しない場合は、Identity Manager によって確認のメッセージが表示されたあと、ディレクトリが作成されます。

5. 「Ready to Install」ページで、「Install Now」をクリックしてインストールを開始します。
ファイルがインストールされると、Identity Manager の「Launch Setup」パネルが表示されます。

注意

インデックスデータベースの使用を計画している場合は、処理を続行する前に、`idm\WEB-INF\lib` ディレクトリへの 1 つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (**DriverManager** 接続の場合)、または JNDI InitialContextFactory を含む JAR ファイル (データソース接続の場合) を `idm\WEB-INF\lib` へ置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。終了したら、「**Launch Setup**」をクリックしてセットアップウィザードを起動し、セットアップ手順を続行します。

すべての JAR ファイルのコピーが完了しているかどうかを確認するポップアップウィンドウが表示されます。コピーが完了している場合は、「**Yes, Continue**」をクリックします。

インデックスデータベースのファイルをコピーする前に「**Launch Setup**」をクリックすると、セットアップが正しく続行されません。そのような場合には、インストールプログラムを終了してから、`lh setup` コマンドを使用してインストールプロセスの設定部分をやり直します。

6. 「Sun Setup Wizard」パネルの「**Next**」をクリックします。
 インストーラの「**Locate the Repository**」パネルが表示されます。
7. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。
 選択項目および設定の手順については、75 ページの「[インデックスデータベースのリファレンス情報](#)」を参照してください。
8. 「**Next**」をクリックします。
9. 「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルが表示されます。
10. これがデモ以外のインストールである場合は、「**No, I will configure Identity Manager myself**」をクリックします。手順 19 に進んでください。
11. デモ設定をする場合は、「**Yes, I would like to continue setting up a demonstration environment**」をクリックします。
 これにより、ユーザーの設定や、環境およびサーバー情報の入力をすばやく行うことができます。
12. 次の個人情報を入力します。
 - 名
 - 姓
 - 電子メールアドレス

注 この個人情報を使用して、**Configurator** 特権を持つ承認者ユーザーが作成されます。

13. 次の承認者情報を入力します。
 - 承認者名
 - 承認者パスワード
14. 「**Next**」をクリックします。
15. 「**Server Type**」をリストから選択します。

使用している環境に管理するサーバーがない場合は、「**None**」を選択します。管理するサーバーが存在する場合は、適切なサーバーのタイプを選択します。必要に応じて、追加のサーバー情報を入力するよう求められます。
16. 電子メールの **SMTP** サーバーがある場合は、「**SMTP Host**」をクリックして、サーバーアドレスを入力します。必要に応じて、「**Test Server**」をクリックして、SMTP サーバーとの通信を確認します。
17. 電子メール通知をファイルに書き込む場合は、「**Notification File**」をクリックします。別の通知ファイルを選択するには「**Browse**」をクリックします。
18. 「**Next**」をクリックします。
19. インストーラの「**Save Configuration**」パネルが表示されます。
20. 「**Execute**」をクリックして、リストされているすべての機能を実行します。必要に応じて、「**Hide Details**」をクリックします。
21. 操作が完了したら、セットアップパネルの「**Done**」をクリックします。
22. アプリケーションサーバーが **UNIX** マシンにインストールされている場合は、ディレクトリを `$WSHOME/bin` ディレクトリに変更し、次のコマンドを実行して、このディレクトリでスクリプトを実行できるようにします。

```
chmod -R +x *
```

詳細情報の入手

インストールが完了すると、インストーラの「**Installation Summary**」パネルが表示されます。インストールに関する詳細情報を表示するには、「**Details**」をクリックします。

ここにはすべてのメッセージが表示されない可能性があります。詳細については、指定されているログファイルを表示してください。

完了したら、「**Close**」をクリックしてインストーラを終了します。

インストールが完了したら、オプションで Sun Identity Manager Gateway のインストールに進みます。

手順 3: Identity Manager を Oracle Application Server に配備する

次の手順を実行して、Identity Manager アプリケーションを Oracle Application Server に配備します。

1. コマンドプロンプトを開き、Identity Manager ファイルをインストールしたステージングディレクトリに移動します。これは、「[手順 2: Identity Manager ソフトウェアをインストールする](#)」の[手順 4](#)で指定したディレクトリです。
2. jar.exe (Windows の場合) または jar (UNIX の場合) コマンドを使用して、Identity Manager ファイルを含む .war ファイルを作成します。

```
c:\¥java1.5¥bin¥jar.exe cvf ..¥idm.war *
/usr/bin/jar cvf ../idm.war *
```
3. アプリケーションサーバーを起動し、Oracle Application Server 制御コンソールにログインします。
4. 「クラスタポロジ」ページに移動します。「アプリケーションサーバーによる表示」を選択します。「OC4J 名」リンクを選択します。
5. 「OC4J ホーム」ページで、「アプリケーション」リンクをクリックします。
6. 「**配備 ...**」ボタンをクリックします。
7. 「**アーカイブ**」テキストボックスに、idm.war ファイルへのファイルパスを入力します。
8. 「**配備計画**」セクションで、「**新しい配備計画を自動的に作成する**」を選択します。「**次へ**」をクリックします。
9. 「**配備: アプリケーション属性**」ページで、「アプリケーション名」を idm に設定します。「コンテキストルート」を「/idm」に設定し、「**次へ**」をクリックします。
10. サイトの必要に応じて、任意の配備設定を指定します。
11. 「**配備**」ボタンをクリックします。Identity Manager が配備されると、コンソールに確認画面が表示されます。

手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「[Sun Identity Manager Gateway のインストール手順](#)」の手順に従います。

Sun Identity Manager Gateway の インストール手順

次のリソースアダプタのいずれかを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールする必要があります。

- Windows Active Directory
- Domino
- Novell NetWare (GroupWise を含む)
- Remedy
- RSA ACE/Server
- スクリプト Gateway

前提条件

Sun Identity Manager Gateway は、Windows 2000 SP3 以降および Windows 2003 プラットフォーム上にインストールできます。

Sun Identity Manager Gateway を実行するシステムでは、Dr. Watson が視覚的な通知を生成しないように設定してください。この機能が設定されていると、ゲートウェイがエラーを検出した場合、ポップアップウィンドウが閉じられるまで処理がハングアップします。

またゲートウェイシステムでは、Identity Manager が管理する全データと互換性のある、デフォルトの ANSI コードページを使用するように設定してください。

可能なかぎり UTF-8 を使用し、1つのゲートウェイから複数のリソースにアクセスする必要がある場合は、ゲートウェイと全リソースで UTF-8 を使用するように設定してください。

異なるコードページを使用するリソースにアクセスする必要がある場合は、コードページごとに個別のゲートウェイをインストールします。ゲートウェイとリソースで同じコードページが実装されるようにしてください。

Windows XP および Server 2003 システムの国際サポートの設定については、次の Web ページを参照してください。

<http://www.microsoft.com/globaldev/handson/user/xpintlsetup.msp>

インストール

Windows マシンにゲートウェイをインストールするには、次の手順に従います。

1. ゲートウェイをインストールする Windows マシンを選択します。このマシンは、アカウントやその他のオブジェクトが管理されるドメインのメンバーか、または管理されたドメインによって信頼されているドメインのメンバーである必要があります。ゲートウェイは、ドメインコントローラ上で実行される必要はありません。

注 パフォーマンスを向上させるには、ゲートウェイを、管理されたドメインのドメインコントローラの近く（ネットワーク接続の観点から）に配置するようにしてください。

2. Identity Manager サーバーではないシステムを選択する場合は、次の手順に従います。
 - a. 遠隔システム上に idm という名前のディレクトリを作成します。
 - b. Identity Manager インストール CD から gateway.zip ファイルをコピーします。
 - c. gateway.zip ファイルを展開し、その内容を idm ディレクトリにコピーします。
3. ゲートウェイファイルがインストールされているディレクトリから次のコマンドを実行して、ゲートウェイをサービスとしてインストールします。

```
gateway -i
```

4. 次のコマンドを実行してゲートウェイサービスを開始します。

```
gateway -s
```

-
- 注
- 次のコマンドを実行してゲートウェイサービスを停止できます。

```
gateway -k
```

- 次の手順でも、ゲートウェイを開始および停止できます。
 - Windows のコントロールパネルを開きます。
 - 「サービス」を開きます。Windows では、「サービス」は「管理ツール」に配置されています。
 - 「Sun Identity Manager Gateway」を選択します。
 - 「開始」または「停止」をクリックします。
-

エラーメッセージ

ゲートウェイの動作中に表示される 2 つの一般的なメッセージと、その考えられる原因を次に示します。

- 「重複した I/O 処理を実行しています」

このメッセージのもっとも一般的な原因は、以前のインストールまたは削除が完全に終了する前に、サービスをインストールまたは削除しようとしたことです。サービスの状態を確認してください。
- 「入出力エラー」

このもっとも一般的な原因は、このサービスを実行する権限を持っていないことです。

次の作業

Identity Manager の使用を開始するには、61 ページの「Identity Manager 入門」の手順に従います。

前提条件

Identity Manager 入門

次の手順に従って、Identity Manager または Service Provider の使用を開始します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. Web ブラウザで、ポートを含むアプリケーションサーバーの URL と、それに続けて Web アプリケーションの URL (通常は /idm) を入力します。

たとえば、`http://appserver.example.com:8080/idm` です。

注 Web サーバーとして Internet Information Server (IIS) を使用している場合は、IIS 内の Identity Manager 仮想ディレクトリの「プロパティ」にある「デフォルトドキュメント」のリストに `index.html` を追加する必要があります。そうしないと、Identity Manager サーバーにアクセスしたときに、アプリケーションのメインページが正しく解決されません。

3. ログインするためのユーザー ID とパスワードを入力します。次のいずれかのデフォルトのアカウント ID とパスワードを使用してログインできます。

ID: Configurator

パスワード: configurator

または

ID: Administrator

パスワード: administrator

注意 インストールのあと、デフォルトの管理者アカウントのパスワードをリセットすることを強くお勧めします。

注 セキュリティー上の理由から、さらに、**https** を使用するセキュリティ保護された Web サーバーを介してアプリケーションにアクセスすることをお勧めします。セキュリティに関するその他の推奨事項については、『Identity Manager 管理ガイド』にある「Identity Manager セキュリティー」の章を参照してください。

言語サポートの有効化

アプリケーションでは、複数の言語がサポートされています。ご使用のアプリケーションサーバーにローカライズ版ファイルをインストールするには、次の手順に従います。

1. オンラインサポートセンターの一部である Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) から言語パックをダウンロードします。ダウンロードセンターにアクセスするには、登録済みのアカウント名とパスワードが必要です。
2. ダウンロードした言語パックを一時的な場所に展開します。
3. JAR ファイルを一時的な場所から `IdentityManagerInstallation/WEB-INF/lib` ディレクトリにコピーします。
4. アプリケーションサーバーインスタンスを再起動します。

Identity Manager のローカライズに関する詳細は、Identity Manager の各言語パックに含まれている Identity Manager L10N Readme ファイルを参照してください。

Mac OS X 用の Identity Manager の配備

Identity Manager を配備する場合は、Mac OS X 環境に適応させるために、いくつかの変更を行う必要があります。

lh.sh ファイルを変更する

Darwin をオペレーティングシステムとして検出するには、`bin/lh.sh` ファイルを変更する必要があります。そうしないと、Identity Manager は、Windows オペレーティングシステム上で実行されていると見なします。

ユーザーインターフェースの MultiSelect コンポーネントをカスタマイズする

Identity Manager ユーザーインターフェースで、デフォルトで提供されている MultiSelect ボックスは Safari ブラウザとは互換性がありません。MultiSelect コンポーネントを含むすべてのフォームを、noApplet オプションでカスタマイズする必要があります。このオプションは次のように設定します。

```
<Display class='MultiSelect'>  
<Property name='noApplet' value='true' />  
...
```

Safari Enhancer を管理者インターフェースに使用する

管理者インターフェースは Safari では正式にサポートされていませんが、Safari 上でも動作するように次の方法を試すことができます。ただし、この方法は正式にサポートされているものではありません。

1. Safari を終了します。
2. Safari Enhancer を次の場所からインストールし、Safari の「デバッグ」メニューを有効にします。
<http://www.versiontracker.com/dyn/moreinfo/macosx/17776>
3. Safari を再起動します。
4. 「デバッグ: ユーザーエージェント」メニューから「MSIE 6.0」を選択します。
5. Safari が Identity Manager インストール環境を指すようにします。

lh 環境の設定

一部の配備では、lh を機能させるために、シェル環境 (または Windows のコマンド環境) に環境変数やその他の設定を追加する必要があります。たとえば、WebSphere データソースをリポジトリに使用する場合は、追加の環境変数が必要になります。

lh が配備に固有の環境設定をロードするために使用する環境ファイルを作成できません。このファイルは、次の名前と場所で設定する必要があります。

`$WSHOME/bin/idm-env.sh` (UNIX)

`%WSHOME%\bin\idm-env.bat` (Windows)

このファイルは提供されていません。ただし、独自の環境ファイルを作成するための開始点として次のファイルを使用できます。

`sample/other/idm-env.sh-ws5` (UNIX)

`sample\other\idm-env.bat-ws5` (Windows)

ヘルプおよびその他の情報

インストールのあとの Identity Manager の使用には、次の印刷版およびオンラインのマニュアルや情報が役立ちます。

- **Identity Manager 管理ガイド**
Identity Manager を使用して企業情報システムへのセキュリティー保護されたユーザーアクセスを実現する方法に関する手順、チュートリアル、および例が記載されています。
- **Identity Manager の配備に関する技術情報**
Identity Manager 製品の概念に関する概要 (オブジェクトアーキテクチャーを含む) および基本的な製品コンポーネントの紹介が記載されています。
- **Identity Manager ワークフロー、フォーム、およびビュー**
Identity Manager のワークフロー、フォーム、およびビューの使用法を示す参照情報と手順が記載されています。この中には、これらのオブジェクトをカスタマイズするのに必要なツールに関する情報が含まれます。
- **Identity Manager リソースリファレンス**
アカウント情報をリソースから Sun Java™ System Identity Manager に読み込んで同期する方法を示す参照情報と手順が記載されています。
- **Identity Manager 配備ツール**

さまざまな Identity Manager 配備ツールの使用方法に関する参照と手順情報が記載されています。規則と規則ライブラリ、共通のタスクとプロセス、辞書サポート、Identity Manager サーバーによって提供される SOAP ベースの Web サービスインタフェースなどの情報が含まれます。

- Identity Manager ヘルプ

Identity Manager の完全な手順、参照情報、用語の説明を記載したオンラインガイドンス、オンライン情報です。ヘルプにアクセスするには、Identity Manager メニューバーの「ヘルプ」リンクをクリックします。主要なフィールドには、ガイドンス (フィールド固有の情報) があります。

アプリケーションのアンインストール手順

次の手順を実行して、以下のものを削除します。

- アプリケーションソフトウェア
- アプリケーションデータベース

ソフトウェアの削除

次の手順を使用して、Windows または UNIX 環境からソフトウェアを削除します。

Windows の場合

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. Windows サーバーを使用して Sun Identity Manager Gateway を実行している場合は、`gateway -k` を使用してゲートウェイサービスを停止します。

注 あとで、次のコマンドを使用してゲートウェイサービスを削除できます。

```
gateway -r
```

3. 構成データベースファイルを削除します。次の手順で実行します。
 - a. データベースサーバーにログインします。
 - b. データベースのタイプに応じた `drop_waveset_tables.DatabaseType` スクリプトを実行します。
4. Windows のコントロールパネルから、「プログラムの追加と削除」機能を開きます。

5. Identity Manager をクリックしてハイライト表示し、「変更と削除」をクリックします。システムの「Uninstaller」パネルが表示されます。
6. 「Uninstall Now」をクリックして、アプリケーションファイルとレジストリエントリを削除します。「Uninstall Summary」を読んだあと、「Finish」をクリックします。
7. アプリケーションサーバーから、アプリケーションソフトウェアへのリンクや参照を削除します。

UNIX の場合

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. インストールされているアプリケーションの場所に移動します。
3. 構成データベースファイルを削除します。次の手順で実行します。
 - a. データベースサーバーにログインします。
 - b. データベースのタイプに応じた `drop_waveset_tables.DatabaseType` スクリプトを実行します。
4. 次のコマンドを入力します。

```
java -cp . uninstall_Sun_Java_System_Identity_Manager
```

-
- 注
- このファイルの `.class` 拡張子をコマンドに含めないでください。
 - `$WSHOME` がクラスパス内にある場合、`-cp .` 引数を省略できます。
-

アプリケーションデータベースの削除

次のいずれかのコマンドを使用してアプリケーションデータベースを削除します。

データベース	プラットフォーム	実行するコマンド
MySQL	Windows	<code>c:\mysql\bin\mysql < drop_waveset_tables.mysql</code>
MySQL	UNIX	<code>\$MYSQL/bin/mysql < drop_waveset_tables.mysql</code>
Oracle	Windows	<code>sqlplus dbusername/dbapassword @drop_waveset_tables.oracle</code>

データベース	プラットフォーム	実行するコマンド
Oracle	UNIX	sqlplus <i>dbusername/dbapassword</i> @drop_waveset_tables.oracle
DB2	Windows および UNIX	db2 tvf drop_waveset_tables.db2
SQL Server	Windows	isql -S <i>Server</i> -U <i>User</i> -P <i>Password</i> -i <i>PathToFile</i> \drop_waveset_tables.sqlserver

アプリケーションデータベースの削除

Identity Manager の手動インストール手順

インストールのインタフェースを通して **Identity Manager** をインストールしたくない場合は、代わりにこの手動のインストール手順を使用します。

インストール手順

この章およびほかの章で説明されている、以下の一般的なインストールおよび設定手順に従います。

- 手順 1: **Application Server** ソフトウェアをインストールする
- 手順 2: **アプリケーションソフトウェア** をインストールする
- 手順 3: **Identity Manager** のインデックスデータベース接続を設定する
- 手順 4: **Sun Identity Manager Gateway** をインストールする

手順 1: Application Server ソフトウェアをインストールする

アプリケーションサーバーのインストールおよび設定プロセスは、タイプによって異なります。各インストールおよび設定の詳細については、前のアプリケーションサーバー固有のインストールの章を参照してください。

手順 2: アプリケーションソフトウェアをインストールする

次の手順を実行して、ソフトウェアをインストールします。

Windows の場合

次の一連のコマンドを入力します。

```
set JAVA_HOME=Path to JDK
cd ApplicationDeploymentDirectory
```

ここで、*ApplicationDeploymentDirectory* は、アプリケーションサーバーが配備されているディレクトリです。たとえば、Tomcat のインストールの場合は、`c:\tomcat-5.5.3\webapps` ディレクトリに移動します。

```
mkdir idm (またはほかの任意のディレクトリ名)
cd idm
set WSHOME=ApplicationDeploymentDirectory\idm
jar -xvf %CDPATH%\idm.war
```

注 WSHOME 環境変数の値に次の文字が含まれないようにしてください。

- 二重引用符 ("")
- パスの末尾にバックスラッシュ (\)

アプリケーションの配備ディレクトリへのパスにスペースが含まれている場合でも、二重引用符を使用しないでください。

UNIX の場合

次の一連のコマンドを入力します。

```
PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
cd $TOMCAT_HOME/webapps
cd ApplicationDeploymentDirectory
```

ここで、*ApplicationDeploymentDirectory* は、アプリケーションサーバーが配備されているディレクトリです。たとえば、Tomcat のインストールの場合は、`/tomcat-5.5.3/webapps` ディレクトリに移動します。

```
mkdir idm (またはほかの任意のディレクトリ名)
cd idm
WSHOME=ApplicationDeploymentDirectory/idm;export WSHOME
jar -xvf /cdrom/cdrom0/idm.war
```

\$WSHOME/bin ディレクトリに移動し、ディレクトリ内のファイルを実行できるように、アクセス権を設定します。

処理を続行する前に

インデックスデータベースの使用を計画している場合は、idm/WEB-INF/lib ディレクトリへの1つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。たとえば、JDBC ドライバを含む JAR ファイル (DriverManager 接続用) または JNDI InitialContextFactory を含む JAR ファイル (データソース接続用) を置くことが必要な場合があります。処理を続行する前に実行する必要がある手順を判断するには、[75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」](#)を参照してください。

終了したら、手順 3 に進みます。

手順 3: Identity Manager のインデックスデータベース接続を設定する

ServerRepository.xml ファイルは、インデックスリポジトリに接続する方法が定義されている、暗号化されたファイルです。次のいずれかの手順を使用して、リポジトリ XML ファイルを設定します。

Windows または X ウィンドウ (UNIX) 環境

Windows または X ウィンドウ対応環境で実行している場合は、次の手順に従います

1. 次のいずれかのコマンドを入力して、セットアップのインタフェースを起動します。

Windows の場合

```
cd %WSHOME%\bin
lh setup
```

UNIX の場合

```
cd $WSHOME/bin
lh setup
```

インストーラの開始画面が表示されます。「Next」をクリックして、「Locate the Repository」パネルを表示します。

2. 提供されるリストからインデックスデータベースを選択します。選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

選択した内容に応じて、設定プログラムは追加の設定情報の入力を要求します。

注 選択項目および設定の手順については、75 ページの「インデックスデータベースのリファレンス情報」を参照してください。

3. 「Next」をクリックして、「Continue Identity Manager Demo Setup?」パネルを表示します。以後のすべての指示に従います。

X ウィンドウ以外の環境

X ウィンドウ対応環境で実行していない場合は、次の手順に従います

1. 次の一連のコマンドを使用してインデックスリポジトリを設定します。

```
cd $WSHOME/bin
chmod 755 *
```

2. データベースへの接続に必要な適切な引数オプションを使用して、setRepo コマンドを実行します。

注 完全な setRepo の使用法とオプションについては、101 ページの「setRepo リファレンス」を参照してください。

3. アプリケーションサーバーを起動します。
4. 初期データベース値を読み込みます。次の一般的な手順に従います。
 - a. 管理者インタフェースにログインします。
 - b. メニューバーから、「設定」→「交換ファイルのインポート」を選択します。
 - c. init.xml ファイル (idm\sample ディレクトリに格納されている) を入力または参照し、「インポート」をクリックします。

手順 4: Sun Identity Manager Gateway をインストールする

Windows Active Directory、Novell NetWare、Domino、Remedy、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールするようにしてください。57 ページの「Sun Identity Manager Gateway のインストール手順」の手順に従います。

インデックスデータベースのリファレンス情報

インデックスデータベースの使用を計画している場合は、インストールプロセス中に、`idm\WEB-INF\lib` ディレクトリへの1つ以上のファイルのコピーが必要になることがあります。次の表は、インデックスデータベースのタイプに応じてコピーする必要がある1つ以上の `.jar` ファイルのダウンロードまたはインストール済み製品の場所を示しています。

インデックスデータベース	ダウンロードまたは製品の場所	設定の注意点
DB	Db2/java/db2java.zip または タイプ4のネットワークドライバを使用している場合は、代わりに次のファイルを使用します。 db2jcc.jar DB2 8.1.2 以上を使用している場合は、次のファイルも必要です。 db2jcc_license_cisuz.jar db2jcc_license_cu.jar	db2java.zip ファイルを解凍します。 Windows システムでは、 <code>db2java.zip</code> の名前を <code>db2java.jar</code> に変更することに注意してください。 1. 適切な JAR ファイルを <code>WEB-INF\lib</code> ディレクトリにコピーします。 2. JDBC ドライバを起動します。 • UNIX システムでは、次のように入力します。 <code>db2jstrt port#</code> (デフォルトは <code>6789</code>) これは、インスタンス所有者で実行します。 • Windows システムでは、サービスから起動します。

インデックスデータベース	ダウンロードまたは製品の場所	設定の注意点
MySQL	http://dev.mysql.com/downloads/ ダウンロードする MySQL Connector/J のバージョンを選択します。	コネクタパッケージを展開します。 mysql-connector- <i>Version</i> -bin.jar ファイルを WEB-INF\lib ディレクトリにコピーします。 (オプション) .jar ファイルの名前を mysqljdbc.jar に変更します。
Oracle	Oracle/jdbc/lib/ojdbc14.jar	ojdbc14.jar ファイルを idm\WEB-INF\lib ディレクトリにコピーします。 ojdbc14.jar の名前を oraclejdbc.jar に変更します。
SQL Server	MicrosoftSQL Server 2005 Driver for JDBC/lib	mssqlserver.jar ファイルを WEB-INF\lib ディレクトリにコピーします。
JDBC 2.0 データソース	ディレクトリサービスによって異なります。 InitialContextFactory クラスを含む適切な jar を見つけるには、Application Server またはその他のディレクトリサービスのマニュアルを参照してください。	適切な jar ファイル (1 つまたは複数) を WEB-INF/lib ディレクトリにコピーします。

注 データソース接続の場合は、InitialContextFactory クラスを含む jar をコピーまたはダウンロードし、WEB-INF/lib に格納する必要があります。

Identity Manager ソフトウェアをインストールし、「Locate Identity Manager Repository」パネルでインデックスデータベースの選択を完了する場合は、次の表を参照してください。

選択項目	入力データ
JDBC 2.0 データソース <ul style="list-style-type: none"> • 初期コンテキストファクトリ： com.sun.jndi.fscontext.RefFSContextFactory • データソース名 / パス： jdbc/SampleDB 	インデックスデータベースの場所を入力します。オプションで、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。
MySQL <ul style="list-style-type: none"> • URL: jdbc:mysql://localhost/waveset • JDBC ドライバ: org.gjt.mm.mysql.Driver • 接続時のユーザー: waveset 	インデックスデータベースの場所と、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。
Oracle <ul style="list-style-type: none"> • URL: java:oracle:thin:@host.your.com:1521:dbname • JDBC ドライバ: oracle.jdbc.driver.OracleDriver • 接続時のユーザー: waveset 	インデックスデータベースの場所と、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。
DB2 <ul style="list-style-type: none"> • URL: jdbc:db2://host.your.com:6789/dbname • JDBC ドライバ: COM.ibm.db2.jdbc.net.DB2Driver または com.ibm.db2.jcc.DB2Driver • 接続時のユーザー: Waveset 	インデックスデータベースの場所と、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。

選択項目	入力データ
<p>SQLServer</p> <p>Microsoft SQL Server 2005 JDBC ドライバで使用するデフォルト値:</p> <ul style="list-style-type: none"> • URL: "jdbc:sqlserver://host.your.com:1433;DatabaseName=dbname" • JDBC ドライバ: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver • 接続時のユーザー: waveset <p>Microsoft SQL Server 2000 JDBC ドライバで次の値を使用する:</p> <ul style="list-style-type: none"> • URL: "jdbc:microsoft:sqlserver://host.your.com:1433;DatabaseName=dbname;SelectMethod=Cursor" • JDBC ドライバ: com.microsoft.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver • 接続時のユーザー: waveset 	<p>インデックスデータベースの場所と、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。</p> <p>注意: SQL Server へのすべての接続を、同じバージョンの JDBC ドライバを使用して実行する必要があります。これには、リポジトリのほか、Microsoft SQL アダプタ、Microsoft Identity Integration Server アダプタ、データベーステーブルアダプタ、スク립ト JDBC アダプタ、およびこれらのアダプタに基づく任意のカスタムアダプタを含む、SQL Server のアカウントまたはテーブルを管理または要求するすべてのリソースアダプタが含まれます。異なるバージョンのドライバを使用しようとする、競合エラーが発生します。</p>
<p>LocalFiles</p> <ul style="list-style-type: none"> • パス: c:\jakarta-tomcat\webapps\idm\config 	<p>ディレクトリの場所を入力するか、または「Browse」をクリックして特定します。</p>
<p>Sun Java System Directory Server</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初期コンテキストファクトリ: com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory • URL: ldap://host.your.com/dc=myDomain,dc=your,dc=com • ユーザー: waveset 	<p>インデックスデータベースの場所を入力します。オプションで、データベースをセットアップしたときに選択したパスワードを入力します。</p>

Identity Manager のデータソースの設定

この付録では、次の節で、Identity Manager のデータソースを作成する手順について説明します。

- [Identity Manager の WebSphere データソースの設定](#)
- [Identity Manager の WebLogic データソースの設定](#)
- [Identity Manager の Sun Application Server データソースの設定](#)
- [Identity Manager の JBoss データソースの設定](#)
- [Identity Manager の Oracle Application Server データソースの設定](#)

Identity Manager の WebSphere データソースの設定

次の情報を使用して Identity Manager の WebSphere データソースを設定します。

- [Servlet 2.3 データソース](#)
- [JDBC プロバイダの設定](#)
- [WebSphere JDBC データソースの設定](#)
- [Identity Manager リポジトリのデータソースの指定](#)
- [setRepo コマンドへの追加の JNDI プロパティの指定](#)

Servlet 2.3 データソース

Identity Manager 6.0 のリリース時点では、WEB-INF/web.xml ファイルの配備記述子は Servlet 2.3 を参照します。このため、WebSphere Application Server Version 4 Data Source では Identity Manager Web アプリケーションを使用できなくなりました。

注 WebSphere データソースと Oracle JDBC ドライバの間の相互運用性の問題のため、Identity Manager で WebSphere データソースを使用する Oracle のユーザーは Oracle 10g R2 とそれに対応する JDBC ドライバを使用する必要があります。Oracle 9 JDBC ドライバは WebSphere データソースと Identity Manager では動作しません。10g R2 より前の Oracle のバージョンを所有し、10g R2 にアップグレードできない場合は、Oracle の JDBC Driver Manager を使用して Oracle データベース (WebSphere データソースではない) に接続するように Identity Manager リポジトリを設定します。

Identity Manager の WebSphere データソースを設定するには、次の手順を使用します。

1. JDBC プロバイダを設定します。
2. WebSphere JDBC データソースを設定します。
3. リポジトリにデータソースを指定します。

これらの手順について、次に詳しく説明します。

JDBC プロバイダの設定

WebSphere の管理コンソールを使用して新しい JDBC プロバイダを設定します。

1. 左側の区画で「リソース」タブをクリックして、リソースタイプのリストを表示します。
2. 「JDBC」、「JDBC プロバイダ」を順にクリックして、設定済み JDBC プロバイダのテーブルを表示します。
3. 設定済み JDBC プロバイダのテーブルの上にある「新規作成」ボタンをクリックします。
4. JDBC データベースタイプのリストから、プロバイダのタイプと実装タイプを選択します。「名前」と「説明」フィールドを変更します (オプション)。

この例では、Oracle、Oracle JDBC ドライバ、および接続プールのデータソースが使用されます。

「次へ」をクリックします。

5. データベースのクラスパス情報を入力します。**データベースのクラスパス情報を入力する**ページの内容は、前の手順で選択した内容によって異なります。
 - JDBC ドライバが含まれている JAR のパスを指定します。たとえば、Oracle の thin ドライバを指定するには、次のようなパスを指定します。


```
/usr/WebSphere/AppServer/installedApps/idm/idm.ear/idm.war/WEB-INF/lib/oraclejdbc.jar
```

 「次へ」をクリックします。
 - 必要に応じて、その他のフィールドを完了します。選択したデータベース、プロバイダ、および実装タイプによって、表示されるフィールドが決まります。ダイアログを完了したら、「次へ」をクリックします。
 - 要約ページが表示されます。選択の確認が完了したら、テーブルの下にある「完了」ボタンをクリックします。「保存」リンクをクリックして、定義を保存します。追加したプロバイダが右側の区画に表示されます。

この JDBC プロバイダを使用するデータソースを設定するには、[83 ページの「Identity Manager リポジトリのデータソースの指定」](#)を参照してください。

WebSphere JDBC データソースの設定

WebSphere の管理コンソールを使用して既存の JDBC プロバイダのデータソースを定義します。

認証データの設定

データソースの設定を完了するには、認証データを設定する必要があります。これらの別名には、DBMS への接続に使用される資格が含まれます。

1. 「セキュリティ」 > 「セキュリティ保護された管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャー」をクリックします。
2. 「認証」で、「Java 認証および承認サービスの設定」 > 「J2C 認証データ」をクリックします。「JAAS - J2C 認証データ」パネルが表示されます。
3. 「新規作成」をクリックします。
4. 一意の別名、有効なユーザー ID、有効なパスワード、および短い説明 (省略可能) を入力します。ユーザー ID がターゲットデータベース有効になっている必要があります。
5. 「OK」または「適用」をクリックします。ユーザー ID とパスワードの検証は必要ありません。
6. 「保存」をクリックします。

注 新しく作成したエントリーは、データソース定義で使用するアプリケーションサーバープロセスを再起動しなくても表示されます。ただし、そのエントリーを有効にするには、サーバーの再起動が必要です。

データソースの設定

1. 左側の区画で「リソース」>「JDBC プロバイダ」>「既存のプロバイダ名」>「データソース」タブをクリックして、「データソース」ページを表示します。この JDBC プロバイダで使用するために設定されたデータソースのテーブルが右側の区画に表示されます。データソースのテーブルの上にある「新規作成」ボタンをクリックします。
2. 表示されるウィザードを使用して、新しいデータソースの一般プロパティを設定します。「基本データソース情報を入力する」ページで、次の事項に注意してください。

- 「JNDI 名」は、ディレクトリサービス内のデータソースオブジェクトのパスです。この同じ値を、次のように `-f` 引数として指定する必要があります。
`setRepo -tdbms -iinitCtxFac -ffilepath`
- 80 ページの「JDBC プロバイダの設定」で作成した「コンポーネント管理認証別名」を選択します。これらは、このデータソースで指定されている DBMS へのアクセスに使用される資格を示します。

このパネルの設定が終了したら、「次へ」をクリックします。「新しい JDBC プロバイダを作成する」ページが表示されます。

3. 必要に応じて、このデータソースのデータベース固有のプロパティを設定します。使用可能なプロパティの詳細については、オンラインヘルプを参照してください。

「このデータをコンテナ管理パーシスタンス (CMP) で使用する」のチェックマークが外してあることを確認します。Identity Manager では、Enterprise Java Beans (EJB) は使用しません。「次へ」をクリックして、要約ページに移動します。
4. 「完了」をクリックして、データソースを保存します。

WebSphere クラスタ内のデータソースの設定

クラスタ化された WebSphere 環境でデータソースを設定するときは、セルレベルで設定します。これにより、セル内のすべてのノードからそのデータソースにアクセスできます。

この設定を行うには、`-D $propertiesFilePath` オプションを使用します。この場合、`$propertiesFilePath` は次のようになります。

```
java.naming.provider.url=iiop://localhost:jndi_port/
```

または

```
-u iiop://localhost:jndi_port/
```

指定する JNDI ポートを確認するには、WebSphere の設定を調べます。

1. WebSphere 管理コンソールで、「サーバー」 > 「アプリケーション・サーバー」 > 「サーバー名」 > 「ポート」に移動します。
2. 「**BOOTSTRAP_ADDRESS**」プロパティーを確認します。
java.naming.provider.url プロパティーに指定されたポートを使用します。

注 java.naming.provider.url では、ホスト名として localhost を使用し
ます。WebSphere では、それぞれのアプリケーションサーバーが各自の
JNDI サーバーを照会できるように、クラスタ内の各ノードに JNDI サー
バーが複製されます。データソースの検索時に Identity Manager が照会す
る JNDI サーバーとしてクラスタ内の各アプリケーションサーバーが使用
されるように、ホストには **localhost** を指定してください。

Identity Manager リポジトリのデータソースの指定

新しく作成したデータソースをリポジトリに指定するには、次の手順を使用します。

1. インストールされた Identity Manager を指すように WSHOME 環境変数を設定し
ます。次に例を示します。

```
export WSHOME=$WAS_HOME/installedApps/idm.ear/idm.war
```

\$WAS_HOME は、/usr/WebSphere/AppServer などの WebSphere ホームディレクト
リです。

2. JAVA_HOME 環境変数が正しく設定されていることを確認します。次に例を示し
ます。

```
export JAVA_HOME=$WAS_HOME/java
```

3. Java 実行可能ファイルがパスに含まれていることを確認します。次に例を示し
ます。

```
export PATH=$JAVA_HOME/bin:$PATH
```

4. クラスパスが WebSphere のプロパティーディレクトリを指していることを確認し
ます。次に例を示します。

```
export CLASSPATH=$WAS_HOME/properties
```

5. ディレクトリを \$WSHOME/bin ディレクトリに変更します。

6. (SQLServer の場合のみ): JTA サポートをインストールします。
 - a. SQLServer JTA ディレクトリにある sqljdbc.dll ファイルを、SQLServer データベースサーバーの SQL_SERVER_ROOT/binn ディレクトリにコピーします。

注 SQLServer JTA ディレクトリのデフォルトの場所は C:\Program Files\Microsoft SQL Server 2000 Driver for JDBC\SQLServer JTA です。SQL_SERVER_ROOT/binn のデフォルトの場所は C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL\Binn です。

- b. データベースサーバーから、ISQL または OSQL ユーティリティを使用して instjdbc.sql スクリプトを実行します。これも SQLServer JTA ディレクトリにあります。次の例は、これらのユーティリティの使用法を示します。

```
isql -Usa -psa_password -Sserver_name
-iolocation\instjdbc.sql
```

```
osql -E -iolocation\instjdbc.sql
```

7. 元に戻す必要がある場合は、既存の ServerRepository.xml ファイルのコピーをアーカイブします。デフォルトでは、このファイルは \$WSHOME/WEB-INF にあります。
8. リポジトリに新しい場所を指定します。たとえば、次のようにします。

```
lh -Djava.ext.dirs="$JAVA_HOME/jre/lib:$JAVA_HOME/jre/lib/ext:
$WSHOME/lib:$WSHOME/:$WSHOME/runtimes" setRepo
-Uusername
-Ppassword
-toracle -icom.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory
-fDataSourcePath -n -o
```

この例で、DataSourcePath は、たとえば jdbc/jndiname のようになります。
-Djava.ext.dirs オプションにより、WebSphere の lib/ ディレクトリと java/jre/lib/ext/ ディレクトリにあるすべての JAR ファイルが CLASSPATH に追加されます。これは、setRepo コマンドが正常に動作するために必要な処理です。

データソースの設定時に「JNDI 名」フィールドに指定した値と一致するように -f オプションを変更します。このコマンドの詳細については、[101 ページの「setRepo リファレンス」](#)を参照してください。

- RepositoryConfiguration 設定オブジェクトで、connectionPoolDisable 属性を true に設定します。

```
<RepositoryConfiguration connectionPoolDisable='true'>
```

この設定により、不必要な警告が WebSphere から SystemOut.log ファイルに送信されなくなります。詳細については、

<http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21121449> を参照してください。

- 変更を有効にするために WebSphere を再起動します。これにより、システムも再起動されます。

setRepo コマンドへの追加の JNDI プロパティーの指定

setRepo コマンドには、任意のプロパティーセットを指定できるオプションが用意されています。プロパティーファイルを作成してプロパティーを記述することにより、-D \$propertiesFilePath オプションを使用して任意の数の設定を指定できます。これには、JNDI で指定されていないベンダー固有のプロパティーも含まれます。

たとえば、異なる JNDI ポート番号を指定するには、プロパティーファイルに次のような行を記述します。

```
java.naming.provider.url=iiop://localhost:2909
```

Identity Manager の WebLogic データソースの設定

Identity Manager のリポジトリ設定を、WebLogic データソースを指すように更新するには、次の手順を使用します。ここでは、次の内容について説明します。

- [WebLogic データソースの作成](#)
- [JDBC データソースの作成](#)
- [Identity Manager リポジトリのデータソースの指定](#)

WebLogic データソースの作成

この例の手順では、Oracle データベースドライバを使用する場合の設定手順を説明します。作成する個々のエント리는、データベースタイプによって異なります。

-
- 注** これらの手順では、次のものがあることを前提とします。
- WebLogic, Version 8.1 上で動作している Identity Manager インストール環境
 - 現在の作業用リポジトリ
-

接続プールの作成

1. WebLogic 管理コンソール (デフォルトでは `http://localhost:7001/console/`) にログインします。
2. ナビゲーション区画 (左側の区画) にあるドメインの「サービス」フォルダを展開します。
3. 「JDBC」フォルダを展開します。
4. 「接続プール」フォルダを展開します。
5. 右側の区画 (JDBC 接続プール) で、「新しい JDBC 接続プールのコンフィグレーション」をクリックします。
6. 「データベースタイプ」で「Oracle」を選択します。適切なタイプであればどれでも使用できます。ただし、それらを使用するには、ドライバがインストールされている必要があります。
7. 「データベースドライバ」選択ボックスで、適切なドライバを選択します。この例では、「Oracle's Driver (Thin)」を選択します。
8. 「続行」をクリックします。
9. JDBC ドライバを次のように設定します。

値	措置
名前	接続プールを識別する一意の名前を選択します。たとえば、myOraConnPool のように設定します。
データベース名	接続先の Oracle データベースの名前を選択します。この例では myOraDB です。
ホスト名	Oracle DB サーバーのホスト名を指定します。
ポート	データベースサーバーのポート (デフォルトは 1521) を指定します。

値	措置
データベースユーザー名	接続で使用するデータベースアカウントユーザー名を指定します。
パスワード	アカウントユーザーのパスワードを指定します。

10. 「**続行**」をクリックします。
11. このページでデータベース接続をテストするか、または「**この手順の省略**」をクリックします。インストール環境によっては、さらにプロパティの追加が必要になる場合があります。ターゲットデータベースの管理者ガイドを参照してください。

注	<p>次の「接続プールの設定」は、選択したドライバによって異なります。次に示すオプションは、Oracle ドライバの場合のオプションであり、別の種類のドライバを選択する場合は該当しないことがあります。</p> <p>この操作を続けるには、JDBC ドライバがインストールされている必要があります。ターゲットドライバで定められている手順に従ってください。</p>
----------	---

12. 「**作成とデプロイ**」をクリックします。
13. この接続プールの接続設定を設定します。

接続設定の例：

初期容量：20

最大容量：100

増加容量：10

Statement キャッシュ タイプ：LRU

Statement キャッシュ サイズ：20

JDBC データソースの作成

1. ナビゲーション区画(左側の区画)にあるドメインの「サービス」フォルダを展開します。
2. 「**JDBC**」フォルダを展開します。
3. 「**データソース**」フォルダを展開します。
4. 右側の区画(JDBC データソース)で、「**新しい JDBC データソースの設定**」をクリックします。

5. JDBC データソースを次のように設定します。

値	措置
名前	このデータソースの一意の名前を選択します。この名前は、 WebLogic コンソール全体での参照として使用されます。たとえば、 MyOraDataSource のように設定します。
JNDI 名	JNDI 名を指定します。データソース名と同じでもかまいません。たとえば、 MyOraDataSource のように指定します。
グローバルトランザクションを受け付ける	このデータソースを使用するグローバルトランザクションを有効にする場合は、このチェックボックスを選択します。デフォルトでは選択されています。このオプションの詳細については、 WebLogic のオンラインヘルプを参照してください。この例では、デフォルトのままにします。
非 XA ドライバ用に 2 フェーズコミットをエミュレート	詳細については、 WebLogic のマニュアルを参照してください。

6. 「**続行**」をクリックします。
7. パート A から「**接続プール**」を選択します。これにより、アプリケーションは配下の接続プールから接続を取得できます。
8. 「**続行**」をクリックします。
9. 新しいデータソースを配備するサーバーを選択します。
10. 「**作成**」をクリックします。

注 設定の各ステップは、指定されたドメインの **WebLogic config.xml** ファイルに保存されます。XML ファイルは次のように変更されます。

```
<JDBCConnectionPool
DriverName="oracle.jdbc.driver.OracleDriver"
Name="myOraConnPool"
Password="{3DES}7Ne5r7/NaLfLyXYQGBHoYg=="
Properties="user=myuser" Targets="myserver"
TestTableName="SQL SELECT 1 FROM DUAL"
URL="jdbc:oracle:thin:@my.hostname:1521:mydatabasename"/>
<JDBCTxDataSource JNDIName="MyOraDataSource"
Name="MyOraDataSource" PoolName="MyOraConnPool"
Targets="myserver"/>
```

Identity Manager リポジトリのデータソースの指定

1. インストールされた Identity Manager を指すように WSHOME 環境変数を設定します。次に例を示します。

```
set WSHOME=C:\bea\user_projects\domains\mydomain\applications\idm
```

2. JAVA_HOME 環境変数が正しく設定されていることを確認します。次に例を示します。

```
set JAVA_HOME=C:\j2sdk1.5
```

3. 選択したデータベースドライバが WebLogic Server 用にインストールされていることを確認します。詳細については、WebLogic のマニュアルを参照してください。この例では、Oracle のドライバおよび classes12.jar は次のディレクトリにインストールされています。

```
WebLogicHome\server\lib
```

- a. Windows の場合、これらのファイルを含むクラスパスを次のように設定します。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;WeblogicHome\server\lib\<MyDBLibrary>
```

- b. Oracle の場合、これらのファイルを含むクラスパスを次のように設定します。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;c:\bea\weblogic81\server\lib\classes12.zip
```

4. CLASSPATH に weblogic.jar を含めます。Windows の場合、次のように入力します。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;WeblogicHome\server\lib\weblogic.jar
```

たとえば、次のようにします。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;c:\bea\weblogic81\server\lib\weblogic.jar
```

5. ディレクトリを %WSHOME ディレクトリに変更します。
6. バックアップの作成後、j2ee.jar ファイルを WEB-INF\lib\ から削除します。
7. ディレクトリを %WSHOME\bin ディレクトリに変更します。
8. リポジトリに新しい場所を指定します。たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tOracle -iweblogic.jndi.WLInitialContextFactory  
-fDataSourceName -u"t3:Server:Port" -U"Username" -P"Password"
```

たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tOracle -iweblogic.jndi.WLInitialContextFactory  
-fMyOraDataSource -u"t3://localhost:7001/" -U"weblogic" -P"weblogic"
```

注 「JNDI 名」 フィールドで選択した値と一致するように `-f` オプションを変更します。

9. エラーが報告されなかった場合は、変更を有効にするために **WebLogic** を再起動します。これにより、**Identity Manager** システムも再起動されます。

Identity Manager の Sun Application Server データソースの設定

データソースの作成および設定については、**Sun Application Server** のマニュアルを参照してください。

注 この手順では、環境変数 `WSHOME` (または同等の Java システムプロパティ `waveset.home`) に **Identity Manager Web** アプリケーションが配備されている場所へのパスが含まれている必要があります。

Application Server データソースをリポジトリに指定するには、次の手順を使用します。

1. `j2ee.jar` ファイルを `$WSHOME/WEB-INF/lib` ディレクトリから削除します。このファイルを削除しないと、**Application Server** とともに出荷される `j2ee.jar` との競合が発生します。
2. デフォルトのホスト名とポートを使用していない場合は、`JAVA_OPTS` に次のフラグを追加する必要があります。

```
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialHost=Hostname  
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialPort=Port
```

`Hostname` と `Port` のデフォルト値は、それぞれ `localhost` と `3700` です。

3. 次の **Application Server JAR** ファイルを、この順序で `CLASSPATH` に含めるように設定します。

```
SAS_INSTALL_DIR/lib/appserv-admin.jar  
SAS_INSTALL_DIR/lib/appserv-rt.jar  
SAS_IMQ_DIR/lib/imq.jar  
SAS_INSTALL_DIR/lib/j2ee.jar
```

4. JDBC 接続に必要な JAR ファイルを CLASSPATH に含めるように設定します。たとえば、次のようにします。

DataDirect JDBC ドライバ (Oracle)

- `SAS_INSTALL_DIR/lib/jdbcdrivers/smoracle.jar`
- `SAS_INSTALL_DIR/lib/jdbcdrivers/smbase.jar`
- `SAS_INSTALL_DIR/lib/jdbcdrivers/smutil.jar`

MySQL

- `MYSQL_DIR/lib/mysql-connector-java-3.0.9-stable-bin.jar`

5. ディレクトリを `$WSHOME/WEB-INF` に変更します。
6. Sun Application Server とともに出荷される Data Direct JDBC Driver for Oracle 以外のドライバを使用している場合は、次のコマンドを使用してデータソースに接続します。

```
lh setRepo -v -tType -iInitContextFactory -fDataSourcePath
-uiiop://hostname:port
```

たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tOracle
-icom.sun.enterprise.naming.SerialInitContextFactory -fjdbc/idm
-uiiop://localhost:3700
```

注 Data Direct JDBC Driver for Oracle を使用しているときに、このコマンドを入力すると、次の例外が発生して操作が失敗します。

```
java.sql.SQLException: [sunm][Oracle JDBC Driver]This
driver is locked for use with embedded applications.
```

7. Sun Application Server とともに出荷される Data Direct JDBC Driver for Oracle は、組み込みアプリケーションでのみ動作するように「ロック」されています。つまり、ドライバは Web コンテナ内でのみ動作します。したがって、lh コマンドを使用するには、別個の接続を確立する必要があります。

- a. 既存の `$WSHOME/WEB-INF/ServerRepository.xml` ファイルをアーカイブします。
- b. 次のコマンドを使用して、強制的に接続し、新しい `ServerRepository.xml` ファイルを作成します。

```
lh setRepo -tOracle
-icom.sun.enterprise.naming.SerialInitContextFactory -fjdbc/IdMgr
-uiiop://Hostname:Port -n -o ServerRepository.xml
```

Identity Manager の JBoss データソースの設定

データソースの作成および設定の詳細については、JBoss アプリケーションサーバーのマニュアルを参照してください。

データソースの作成

1. データベースタイプの JDBC ドライバクラスを、アプリケーションサーバーの lib ディレクトリ (*JBossInstallDir*\server\default\lib など) にコピーします。
2. データソース設定ファイルを作成します。これらのファイルは、末尾が *-ds.xml* となります。ファイルの例が *JBossInstallDir*\docs\examples\jca にあります。ファイルは、ローカルランザクションのデータソースを設定します。
3. 設定ファイルを、アプリケーションサーバーの *JBossInstallDir*\server\default\deploy ディレクトリにコピーします。

Identity Manager のデータソースの指定

1. WSHOME および JAVA_HOME 環境変数が正しく設定されていることを確認します。
2. 次のコマンドを使用してデータソースに接続します。
3. リポジトリにデータソースを指定します。たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tType -iInitContextFactory -fDataSourcePath
```

たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tOracle -iorg.jnp.interfaces.NamingContextFactory  
-fjava:DataSourceName
```
4. JBoss サーバーを起動します。

Identity Manager の Oracle Application Server データソースの設定

データソースの設定は、すべて Oracle Enterprise Manager 10g Application Server 制御コンソールで実行できます。Application Server 制御コンソールのオンラインヘルプには、データソースの設定に役立つ情報が記載されています。

Identity Manager のリポジトリ設定を、Oracle Application Server データソースを指すように更新するには、次の手順を使用します。ここでは、次の内容について説明します。

- [Oracle Application Server データソースの作成](#)
- [JDBC データソースの作成](#)
- [Identity Manager リポジトリのデータソースの指定](#)

Oracle Application Server データソースの作成

この例の手順では、Oracle データベースドライバを使用する場合の設定手順を説明します。作成する個々のエントリーは、データベースタイプによって異なります。

接続プールの作成

1. Oracle 10g Application Server 制御コンソール (デフォルトでは <http://localhost:Port/em>) にログインします。
2. 「クラスタトポロジ」 ページで、「アプリケーションサーバーによる表示」を選択します。
3. 「OC4J ホーム」リンクをクリックし、「OC4J: ホーム」 ページで「管理」リンクをクリックします。
4. 「サービス」 > 「JDBC リソース」の「**タスクに移動**」アイコンをクリックします (データソースおよび接続プールの作成、削除、または表示)。
5. 「接続プール」で、「**作成**」ボタンをクリックします。
 - a. 「アプリケーション」ドロップダウンリストから、`idm` を選択します。
 - b. 「**新しい接続プール**」ラジオボタンを選択して、「**続行**」をクリックします。
 - c. 「接続プールの作成」 ページで、次のように新しい接続プールを作成します。

値	措置
名前	接続プールを識別する一意の名前を選択します。たとえば、 <code>IdmOraConnPool</code> のように設定します。
ファクトリクラスの接続	デフォルト値 <code>oracle.jdbc.pool.OracleDataSource</code> を使用します。
JDBC URL	<code>jdbc:oracle:thin:@//hostname:1521/orcl</code> を指定します (または、生成された URL を「接続情報」に入力する)。
ホスト名	Oracle DB サーバーのホスト名を指定します。
ポート	データベースサーバーのポート (デフォルトは 1521) を指定します。
ユーザー名	接続で使用するデータベースアカウントユーザー名を指定します。
パスワード	アカウントユーザーのクリアテキストパスワードを指定します。

- d. 「**テスト接続**」 ボタンをクリックして、接続を確認します。
 - e. インストール環境によっては、「属性」 および「プロパティ」 ページでプロパティの追加が必要になる場合があります。ターゲットデータベースの管理者ガイドを参照してください。
6. 「完了」 ボタンをクリックします。

JDBC データソースの作成

1. 「JDBC リソース」 ページの「データソース」 で、「作成」 ボタンをクリックします。
2. 「アプリケーション」 ドロップダウンリストから、`idm` を選択します。
3. 「管理データソース」 ラジオボタンを選択します。
4. 「続行」 ボタンをクリックします。
5. 「データソースの作成 - 管理データソース」 ページで、次のように JDBC データソースを設定します。

値	措置
名前	このデータソースの一意の名前を選択します。たとえば、 <code>IdmOraDataSource</code> のように設定します。
JNDI 名	JNDI 名を指定します。たとえば、 <code>jdbc/idmpool</code> のように指定します。
トランザクションレベル	デフォルト値 <code>Global & Local Transactions</code> を使用します。
接続プール	作成したばかりの接続プールの名前 (<code>IdmOraConnPool</code>) が表示されています。この例では、デフォルトのままにします。
ログインタイムアウト	インストール時に希望する時間を設定します。

接続プール設定ですでに指定された情報を上書きする必要がないかぎり、「クレデンシャル」セクションにユーザー名とクリアテキストパスワードを入力する必要はありません。

6. 「完了」 ボタンをクリックします。

注	接続情報は、Oracle Application Server の <code>\$J2EE/home/application-deployments/idm</code> ディレクトリにある <code>data-sources.xml</code> ファイルに保存されます。
---	---

Identity Manager リポジトリのデータソースの指定

1. インストールされた Identity Manager を指すように `WSHOME` 環境変数を設定します。次に例を示します。

```
set WSHOME=C:\product\10.1.3.1\OracleAS_1\j2ee\home\applications\idm
```
2. `JAVA_HOME` 環境変数が正しく設定されていることを確認します。次に例を示します。

```
set JAVA_HOME=C:\product\10.1.3.1\OracleAS_1\jdk
```
3. 選択したデータベースドライバが Oracle Application Server 用にインストールされていることを確認します。これらのファイルを含むクラスパスを設定します。詳細については、Oracle Application Server のマニュアルを参照してください。
4. `CLASSPATH` に `OLITE40.JAR` を含めます。Windows の場合、次の例のように入力します。

```
set CLASSPATH=%CLASSPATH%;C:\product\10.1.3.1\OracleAS_1\MOBILE\Sdk\bin\OLITE40.JAR;
```

5. ディレクトリを %WSHOME% ディレクトリに変更します。
6. WEB-INF\ServerRepository.xml ファイルのバックアップを作成し、このディレクトリ以外の場所に移動します。これは、元の Identity Manager インストールからの直接の接続設定です。
7. ディレクトリを %WSHOME%\bin ディレクトリに変更します。
8. Identity Manager の lh コマンドを使用して、リポジトリに新しい場所を指定します。たとえば、次のようにします。

```
lh setRepo -v -tOracle  
-icom.evermind.server.ApplicationClientInitialContextFactory  
-fDataSourceName -n -o ServerRepository.xml
```

注 「JNDI 名」フィールドで選択した値と一致するように `-f` オプションを変更します。

9. エラーが報告されなかった場合は、変更を有効にするために Oracle Application Server を再起動します。これにより、Identity Manager システムも再起動されます。

データベースリポジトリのパスワードの変更

Identity Manager リポジトリの場所として MySQL、Oracle、Sybase、DB2、SQL Server などの DBMS を使用する場合は、データベース接続のパスワードやユーザー名を定期的に変更する必要がある場合があります。これらの値の変更手順は、Identity Manager とデータベースの接続方法によって異なります。

- JDBC ドライバと接続する場合は、「[Identity Manager にパスワードが格納される場合](#)」で説明する手順に従います。
- IDM リポジトリの場所として JDBC データソースオブジェクトを使用して接続し、接続ユーザー名とパスワードがデータソースオブジェクトに格納される場合は、「[データソースにパスワードが格納される場合](#)」で説明する手順に従います。
- JDBC データソースオブジェクトを使用して接続するが、接続ユーザー名とパスワードはデータソースオブジェクトに格納しない場合は、「[Identity Manager にパスワードが格納される場合](#)」で説明する手順に従います。

Identity Manager にパスワードが格納される場合

ここでは、次の操作を行う手順を示します。

- リポジトリのパスワードを変更する
- 変更後のリポジトリ情報が使用されるようにアプリケーションを更新する

注 これらの各手順は、示されている順序どおりに実行することをお勧めします。この一連の手順で指示されている以外の順序でリポジトリのパスワードを変更すると、問題が生じる可能性があります。

この手順では、MySQL リポジトリの場合の例が使用されています。使用するリポジトリによっては、一部の手順が異なる場合があります。

Identity Manager を JDBC ドライバでリポジトリに接続する場合、または接続ユーザー名とパスワードを格納しないデータソースを使用してリポジトリに接続する場合は、次の手順を使用してユーザー名またはパスワードを変更します。

1. 元に戻す必要がある場合に備えて、既存の `ServerRepository.xml` ファイルのコピーをアーカイブします。デフォルトでは、このファイルは `$WSHOME/WEB-INF` にあります。

アプリケーションサーバークラスタに Identity Manager Web アプリケーションを配備した場合は、各ターゲットフォルダ (アプリケーションサーバーは IDM Web アプリケーションをクラスタ内の特定のサーバーまたはノードのここに配備する) ではなく、Identity Manager のメインソースフォルダ (アプリケーションサーバーは IDM Web アプリケーションをここから配備する) で操作してください。

2. Identity Manager Web アプリケーションをシャットダウンします。Identity Manager Web アプリケーションをクラスタに配備した場合は、クラスタ内の Web アプリケーションのすべてのインスタンスを停止する必要があります。
3. 次のコマンドで既存のリポジトリを確認します。

```
lh setRepo -c
```

Identity Manager から現在のリポジトリ情報が返されます。次に例を示します。

```
MysqlDataStore:jdbc:mysql://localhost/waveset
```

4. 次のコマンドで、リポジトリ用の一時ファイルシステムを作成します。

```
mkdir c:\tempfs
```

5. 次のコマンドで、Identity Manager が上で作成した一時ファイルシステムをリポジトリとして使用するよう設定します。

```
lh setRepo -tLocalFiles -fc:\tempfs
LocalFiles:c:\tempfs
```

6. リポジトリのパスワードを変更します。この手順は、リポジトリのプロバイダで提供される機構によって異なります。この例では、MySQL データベースの場合の手順を示します。

```
mysqladmin.exe -hlocalhost -uwaveset -poldpasswd password newpasswd
```

7. 次のコマンドで、変更後のリポジトリ情報が使用されるようにアプリケーションを設定します。

```
lh setRepo -tMysql -ujdbc:mysql://localhost/waveset
-Uwaveset -Pnewpasswd
```

アプリケーションにより次の警告が表示されます。

```
WARNING: No UserUIConfig object in repository.
MysqlDataStore:jdbc:mysql://localhost/waveset
```

注 この警告メッセージが表示されるのは、指定した一時ファイルシステムに内容がないためです。このメッセージは無視してください。コマンドの実行後は、この一時ファイルシステムは不要になります。

8. 次のコマンドで、新しいリポジトリの値を確認します。

```
lh setRepo -c
```

次のように新しい値が表示されます。

```
MySQLDataStore:jdbc:mysql://localhost/waveset
```

9. サーバーを再起動し、ログインできることを確認します。Identity Manager Web アプリケーションをクラスタに配備している場合は、クラスタに Identity Manager を再配備する必要があります。これにより、更新後の Web アプリケーション (更新後の ServerRepository.xml ファイルを含む) が、アプリケーションサーバークラスタ内のすべてのノードに配布されます。
10. `c:\%tempfs` 一時ディレクトリ、および手順 1 でアーカイブした ServerRepository.xml ファイルを削除します。

データソースにパスワードが格納される場合

Identity Manager が JDBC データソースを介してリポジトリに接続し、データソースにユーザー名とパスワードが格納される場合は、次の手順を使用してユーザー名またはパスワードを変更します。

- Identity Manager Web アプリケーションを停止します。Identity Manager をアプリケーションサーバークラスタに配備している場合は、すべてのホスト上のアプリケーションを停止します。
- リポジトリの場所として使用している DBMS インスタンスの接続ユーザー名のパスワードを変更します。たとえば、MySQL の場合は次のようにします。

```
mysqladmin.exe -hlocalhost -uwaveset -poldpasswd password newpasswd
```

- データソースオブジェクトを管理するアプリケーションサーバー、ディレクトリサーバー、または DBMS で提供されているツールを使用して、データソースオブジェクトに格納されているパスワードを変更します。
- サーバーを再起動し、ログインできることを確認します。Identity Manager Web アプリケーションをクラスタに配備した場合は、クラスタに Identity Manager を再配備する必要があります。これにより、更新後の Web アプリケーション (更新後の ServerRepository.xml ファイルを含む) が、アプリケーションサーバークラスタ内のすべてのノードに配布されます。

データソースにパスワードが格納される場合

setRepo リファレンス

使用法

```
setRepo [location_flags] [options]
```

location_flags

フラグ	説明
-d <i>databaseName</i>	URL 内のデータベース名。デフォルトの名前は waveset です。-u フラグが指定されている場合は無視されます。
-D <i>propsPath</i>	プロパティファイルのパス (JDBC/JNDI 接続プロパティ)。
-f <i>filepath</i>	LocalFiles のファイルシステムパス (データソースの JNDI RDN)。
-h <i>hostName</i>	URL 内のホスト名。-u フラグが指定されている場合は無視されます。
-i <i>initCtxFac</i>	JNDI の InitialContextFactory クラスの名前。
-j <i>jdbcDriver</i>	JDBC ドライバクラス。デフォルトは DBMS によって異なります。
-o <i>outfile</i>	設定結果の出力先となるファイルのパス (このパスで指定したファイルに設定内容を書き込み、サーバーの設定ファイルは更新しない)。
-p <i>portNumber</i>	URL 内のポート番号。-u フラグが指定されている場合は無視されます。

-P <i>password</i>	JDBC 接続のパスワード。デフォルト値は <code>waveset</code> です。
-t <i>type</i>	LocalFiles、MySQL、Oracle、DB2、または SQLServer。
-u <i>url</i>	JDBC 接続の URL。-d、-h、および -p フラグよりも優先されます。
-U <i>username</i>	JDBC 接続のユーザー名。デフォルト値は <code>waveset</code> です。

オプション

オプション	説明
-A <i>administrator</i>	管理者ユーザー名。デフォルトのユーザー名は <code>configurator</code> です。
-C <i>credentials</i>	管理者パスワード (デフォルト値から変更した場合)。
-c	(Current) 現在の場所を標準出力に出力します。
-v	(Verbose) 設定を標準出力に出力します。
-n	接続確認を行いません。コマンドを実行する環境から、新しく設定するリポジトリにアクセスできない場合には -o フラグとともに使用します。また、現在のリポジトリにアクセスできない場合には -c フラグとともに使用します。

構文

注	パラメータにシェルエスケープや不正文字が含まれる場合、エラーを避けるには、二重引用符でそれらの文字を囲みます。たとえば、「;」、「&」、「&&」、「 」、「 」などの文字は、これらのエラーの原因になります。
---	--

次に、JDBC ドライバ接続によるリポジトリ設定の場合に指定する引数の例を示します。

```
{-toracle { -u$url | -h$host [-p$port] [-d$dbname] } [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]}
```

```

| -tmysql [ -u$url | [-h$host] [-p$port] [-d$dbname] ] [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]

| -tsqls { -u$url | -h$host [-p$port] [-d$dbname] } [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]

| -tdb2 { -u$url | -h$host [-p$port] [-d$dbname] } [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]

}

```

次に、データソース接続によるリポジトリ設定の場合に指定する引数の例を示します。

```

| -toracle -i$initCtxFac -f$path [-u$providerUrl] [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]

| -tmysql -i$initCtxFac -f$path [-u$providerUrl] [-U$userid -P$pwd] \
[-D$propsPath]

| -tsqlserver -i$initCtxFac -f$path [-u$providerUrl] [-U$userid \
-P$pwd] [-D$propsPath]

| -tdb2 -i$initCtxFac -f$path [-u$providerUrl] [-U$userid -P$pwd] \
[-D$propsPath]

}

```

例

```

setRepo

setRepo -c

setRepo -tLocalFiles -f$WSHOME

setRepo -tOracle -hhost.your.com -p1521 -ddbname

setRepo -tOracle -ujava:oracle:thin:@host.your.com:1521:dbname

setRepo -tOracle -icom.sun.jndi.fscontext.RefFSContextFactory \
-fjdbc/SampleDB

setRepo -tMysql

setRepo -tMysql -ujdbc:mysql://localhost/waveset

setRepo -tSQLServer
-  ujdbc:microsoft:sqlserver://host.your.com:1433;Database\
  Name=dbname;SelectMethod=Cursor

setRepo -tDB2 -ujdbc:db2://host.your.com:6789/dbname

setRepo -tDB2 -ujdbc:db2:dbname -jCOM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver

```

例

DBMS の復旧とリポジトリ

リポジトリの復旧

障害復旧計画は、ビジネスに不可欠なシステムの配備における重要な要素です。サポートされる各 DBMS には、データのバックアップと復元を行うための複数の機構があります。それらのすべてが使用可能であり、Identity Manager の暗黙の要件はありません。

一般に、データベースに障害が発生した場合に必要な処理は、リポジトリを障害発生直前の時点に復元することだけです。ただし、ビジネス要件により、リポジトリを任意の特定時点に復元 (Oracle では ARCHIVELOG モードや Flashback、SQL Server では FULL ログモードなど、該当するベンダー固有の方法を使用) する必要がある場合は、これも実行できます。使用する復旧方法にかかわらず、リポジトリを最新ではないバージョンに復元した場合の影響について検討する必要があります。

データの復元後、リポジトリは自己矛盾のない状態になりますが、リソースなどの外部オブジェクトとは必ずしも整合性がある (または、互換性がある) 状態になるとは限りません。発生する可能性がある不整合のいくつかを次に示します。

- 復元前にリソース属性が変更されていた場合、復元後のリソースの設定が正しくないことがある。
- 復元されたユーザーのある属性の変更処理が保留中になっているが、その属性は、より新しい変更によってすでに不要になっている場合がある。
- 復元されたワークフローとタスクが、環境に一致しなくなった状態になることがある。たとえば、前に完了したタスクが再試行されたり、承認が再度表示されて管理者の操作をリクエストすることがある。

さらに、リソースはそれ自身がアカウント属性のリポジトリです。リポジトリを特定の時点に復元してもリソースを前の状態に復元できないことがあります。これは、前の状態に復元するために必要な情報がリポジトリに格納されたことがない場合があるためです。

redo ログ

特定時点に復旧する方法では、壊れていない変更レコードセット (通常は「redo ログ」と呼ばれる) が存在している必要があります。変更率が高く、大量の redo が生成される場合は、これがロジスティック上の問題となることがあります。

Identity Manager は redo ログを書き込む必要性を最小限にしようとします。ただし、データベースアクティビティを完全に排除することはできません。Identity Manager がアイドル状態に見える場合でも、リポジトリオブジェクト、実行可能なタスク、クリーンアップ可能なタスクなどに対する変更を検出するために、各サーバーはリポジトリをポーリングします。

これらのアクティビティの発生間隔は設定可能であり、これらの設定間隔を大きくすると、Identity Manager がアイドル時にリポジトリに対して実行するデータベース操作の頻度が減ります (ただし排除はされない)。これらの間隔を設定するには、Waveset.properties ファイルで、cache.pollingInterval などの cache で始まるプロパティや、ChangeNotifier などに新しい値を定義します。

さらに、Identity Manager グラフィカルユーザーインターフェースを提供しないクラスタ内のアプリケーションサーバーの listcache.size プロパティを無効にします。このプロパティを無効にすると、Identity Manager がアイドル時にリポジトリに対して実行する操作の数が減ります。

索引

D

DB2

- JDBC アクセス [8](#)
- アプリケーションドライバ [8](#)
- 設定 [8](#)
- データベースのリファレンス [75,77](#)
- ネットワークドライバ [8](#)

H

https [62](#)

I

Identity Manager

- Mac OS X 用の配備 [62](#)
- Oracle Application Server への配備 [54](#)
- Sun Java System Application Server 上の実行 [19](#)
- Sun Java System Application Server への配備 [18](#)
- および DB2 JDBC 接続 [8](#)
- 管理者インタフェース [63](#)
- 関連ドキュメント [64](#)
- データソースの設定 [79](#)

Identity Manager の配備

- Oracle Application Server へ [54](#)
- Sun Java System Application Server [18](#)

idm フォルダ [4,61](#)

IIS、「Internet Information Server (IIS)」を参照

index.html ファイル [61](#)

install コマンドと install.bat [25,37,45](#)

Internet Information Server (IIS) [34](#)

J

Java コンパイラ、設定 [4](#)

JBoss [44](#)

JDBC

- アクセス、DB2 [8](#)
- データソース、作成 [87](#)
- データベースのリファレンス [76,77](#)
- プロバイダ、設定 [80](#)

JNDI プロパティ [85](#)

L

lh 環境、設定 [64](#)

lh.sh ファイル [62](#)

M

Mac OS X、Identity Manager の配備 [62](#)

MultiSelect ボックス [63](#)

N

MySQL

設定 6

データベースのリファレンス 76,77

N

noApplet オプション 63

O

Oracle

設定 7

データベースのリファレンス 76,77

Oracle Applicaton Server

Identity Manager のインストール 50

Identity Manager の配備 54

インストール 50

R

redo ログ 106

S

Safari Enhancer 63

Safari ブラウザ 63

server.policy ファイル、編集 19

ServerRepository.xml ファイル 73,98

Servlet 2.3 データソース 80

setRepo コマンド 98

JNDI プロパティ 85

オプション 102

構文 102

ロケーションフラグ 101

Solaris

サポート xiii

パッチ xiii

SQL Server

設定 10

データベースのリファレンス 76,78

Sun Download Center 62

Sun Java System Application Server 8

Identity Manager のインストール 14

Identity Manager の配備 18

インストール 14

Sun Online Support Center 62

T

Tomcat

Identity Manager のインストール 25

インストール 24

起動スクリプト 24

U

UNIX

Identity Manager の手動インストール 72

インデックスデータベース接続の設定 73,74

W

Web アプリケーションアーカイブ (.war) ファイル 3

Web アプリケーションディレクトリ 4

WebLogic

Identity Manager のインストール 30

JDBC データソースの作成 87

接続プールの作成 86

ソフトウェア、設定 30

データソースの作成 86

データソースの設定 85

配備 34

WebSphere 5.0

Identity Manager のデータソースの設定 79

Identity Manager 用の設定 36

データソースの設定 81, 82

Windows

Identity Manager の手動インストール 72

アンインストール 67, 68

インデックスデータベース接続の設定 73

あ

アプリケーションドライバ、DB2 8

アンインストール

Windows の場合 67, 68

アプリケーションデータベース 68

い

インストール

デフォルトフォルダ 4

お

オプション、setRepo コマンド 102

オンラインマニュアルとヘルプ 64

か

環境、lh、設定 64

け

言語サポート、有効化 62

こ

構文、setRepo コマンド 102

さ

作業の流れ、設定 2

サポート 62

Solaris xiii

サポートされているソフトウェアと環境 1

す

スクリプト、サンプル 5

ステージングディレクトリ 3

ステージングフォルダ 3

せ

接続プール、作成 86

設定

Identity Manager のデータソース 79

JDBC プロバイダ 80

WebLogic ソフトウェア 30

WebLogic データソース 85

WebSphere 5.0 データソース 81, 82

WebSphere 5.0 用の Identity Manager 36

インデックスデータベース接続 73

設定作業の流れ 2

前提条件、インストール

JVM、設定 4

インデックスリポジトリファイルの格納場所を決める 3

概要 3

設定作業の流れ 2

た

た

ダウンロード
言語パック [62](#)

て

データソース
Identity Manager 用の設定 [79](#)
Servlet 2.3 [80](#)
WebLogic、作成 [86](#)
リポジトリの指定 [83, 89](#)

データベース
アンインストール [68](#)

インデックス
DB2 [8](#)
MySQL [6](#)
Oracle [7](#)
SQL Server [10](#)
接続の設定 [73](#)
設定 [5](#)
スクリプト、サンプル [5](#)
リポジトリ
データソースの指定 [83, 89](#)

と

ドキュメント、関連 [64](#)

ね

ネットワーク ドライバ、DB2 [8](#)

は

配備
WebLogic サーバー [34](#)

ひ

ヒープサイズ [1](#)

ふ

ファイル
.war [3](#)
index.html [61](#)
lh.sh [62](#)
redo ログ [106](#)
ServerRepository.xml [73, 98](#)
アプリケーション、格納場所を決める [3](#)

へ

ヘルプ、オンライン [64](#)

め

メモリー要件 [1](#)

よ

要件、メモリー [1](#)

り

リポジトリ、「データベース、リポジトリ」を参照

ろ

ローカルファイルシステム
インデックスデータの格納 [5](#)
パス [77, 78](#)

ログファイル

redo 106

ロケーションフラグ、setRepo コマンド 101

